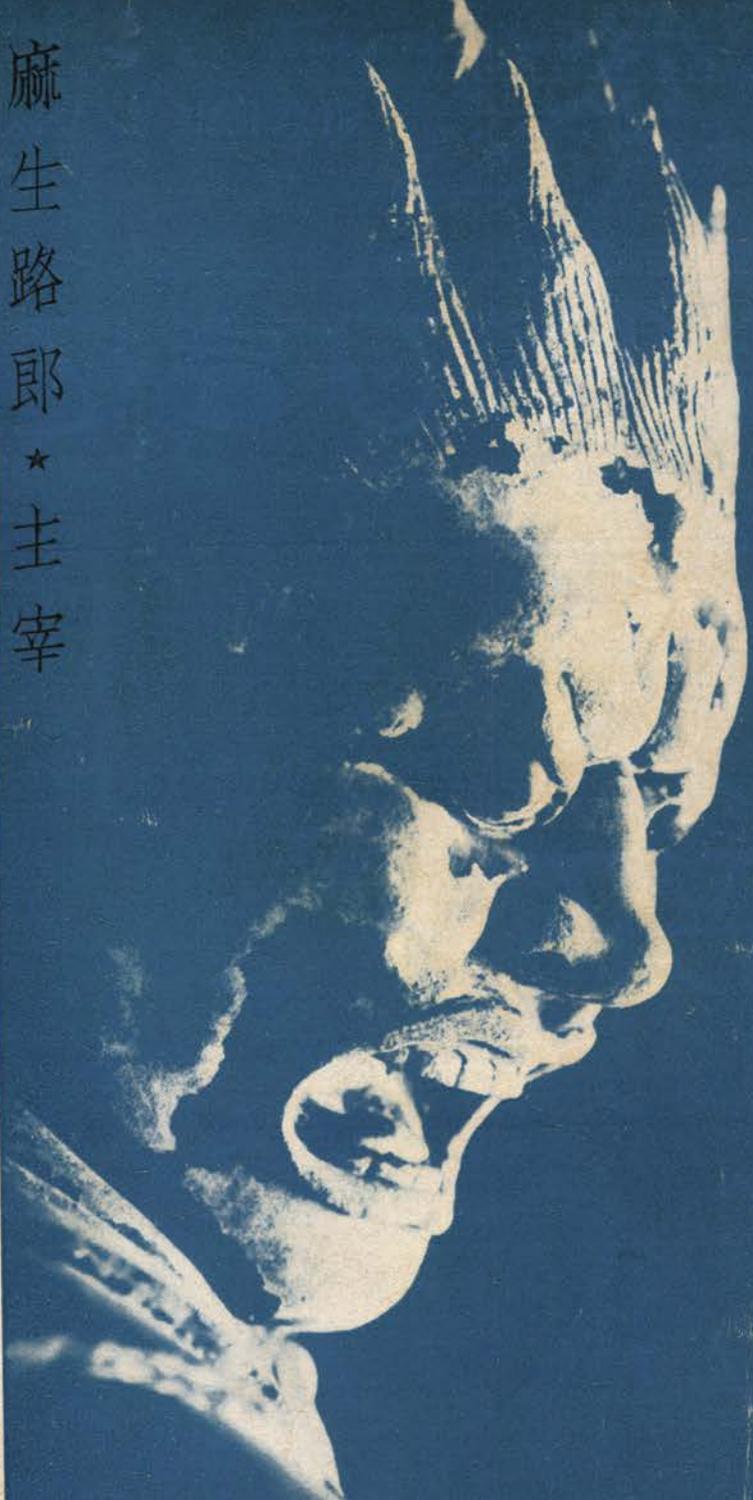


昭和十三年二月二十日發行
第一八號
一月一日發行

麻生路郎★主宰



川

柳

の雄

証

號 月 九

Pensoj flugas trans la land-limon

ガラス壺代用

紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・
組立式各種・薬品・食
料品・菓子等の容器と
して最適



大阪市住吉區晴明通二丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 天下茶屋 五八〇三番
工場用 同 五八〇四番

髪の美は
げに日本の姿なり



マケ・カビミを止め白髪・若元
を助ぎ潤滑な青年髪を創る

伊豆椿ホマド

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

敬神

大阪護國神社
住吉神社
大鳥神社
山東三社巡拜
熊野三山巡拜

驛名改稱

八月一日ヨリ左記ノ通改稱

新驛名			舊驛名		
(線本)			(線本)		
町石	高	葛	山	山	葛
(線手)			(線手)		
寺王天海南海南	丘ヶ鶴海南海南	山香淺手山	寺王天和阪	山ヶ鶴和阪	山香淺和阪
岡荷田塚園山	岡荷田塚園山	岡荷田塚園山	岡荷田塚園山	岡荷田塚園山	岡荷田塚園山
衣歌和東海	衣歌和東海	衣歌和東海	衣歌和東海	衣歌和東海	衣歌和東海

南 海 電 車



川柳忌

★九月の二十三日は柳祖柄井川柳の百五十三回忌に當る。

★柳祖は名を勇之助、三十八歳の時父の後を襲うて八右衛門、姓を柄井と云ひ、俳諧の號を川柳と稱した。

★八代將軍吉宗の治世、享保三年戊戌（つちのへいぬ）十月に江戸で生れ、十一代將軍家齊の治世、寛政二年庚戌（かのへいぬ）九月二十三日に江戸で没した。行年七十三歳。

★柳祖の職業は龍寶寺門前町外數町の名主である。

★柳祖が前句附の點者として卓識衆にすぐれてゐたことは、その選句振りによつてうなづくことが出来るやう。

★現在では川柳忌を九月二十三日に修してゐるが、これは舊曆をそのまま新曆の九月二十三日としたもので、これではホントの祥月命日ではない。これはなんとか一考する必要があらうと思ふ。

★一般に史家や宗教家は斯ういふ問題をどう取扱つてゐるか。實際問題として僧侶などはどう取扱つてゐるか。詳しく調べて見て、根據のある説に隨つて柳祖の忌日を決定したいと思ふ。

★舊曆の日をそのまま新曆で修してゐることは便宜ではあらうが、びつたり來ない感みがある。

★十七八年前までは川柳忌を眞面目に修してゐた社は全國で一二社に過ぎないと云へば嘘のやうだが本誌の第二卷第九號で川柳忌がもつと全國的であることを懇述してゐるのを見ると全く隔世の觀がある。

不朽洞句抄

麻生路郎

いつ出来る家か大工は又煙草
ひまはりが咲く組長を辭めた家
隣組捕手のやうに押し並び
南進論ビール一本では足らず
アイスクリームの土産奥様太つて居

川柳雜誌 九月號目次

表紙……(十二神將)

部心隨筆……………泉融々……(二)

川柳忌……………(一)

川地獄極樂座談會……路郎・菫乃・自由柳・結美・波夢・造・豆萩・某人・春果・小松園・瀧浦・史・晴・白柳子・一笑・石庵・藤野・荷興・史・恒明・柳木・玲之介・夜王・紀多呂

旅の手紙……………高鷺亞鈍……(三)

武玉川四編研究(三)……………梅本座山……(四)

隨想……………蛙子省二……(四)

吟行地 奈良篇(七)……………小山文三……(四)

狸のことなど……………石曾根民郎……(七)

川柳題と例句……………麻生路郎……(二)

義士口上書の疑問……………古川風竹……(天)

愚談……………小畑自由期……(四)

不朽洞會の記……………(五)

川世界史(七)……………戸田孤蓬……(四)

豆ニユース……………(三)

★

不朽洞句抄……………麻生路郎……(一)

近作柳檯……………麻生路郎選……(四)

川柳塔……………麻生路郎選……(六)

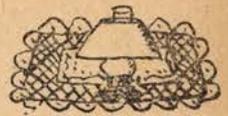
同舟近詠……………諸家……(天)

一狸包……………前田五健選……(六)

各地柳壇……………吉田水車選……(八)

川協(三六)……………柳界展望……(五)

社關係の人々(三六)……………後記……(五)



川柳 句例と題解

=編 郎 路 =

(15) 二等後家

★二等後家といふ呼稱は布哇特有の言葉である。細君が日本を訪問した場合に、留守中の夫をさぞ淋しからうと同情した人達が、その夫に二等後家の呼稱を使用してゐる。従つて細君が歸布すると同時に二等後家の呼稱は解消される譯である。

★ひいては新領事などが祖國に夫人を残し單身赴任して來た場合などにも用ひてゐるらしい。ゴシツプの嵐の中に二等後家 一 浪 内憂も外患もあり二等後家 快夢起 萬目の中に小さく二等後家 伯樂 花便りあつて女房の無事を 草一 知り 綿々の便りはあれど二等後 沙 見送つた當座神妙に家に居 木 棧橋を出れば今日から二等 公 後家 麗花麗 約束も二三日だけ二等後家 同 新領事情知るまで二等後 風 家 二等後家恐れず歸る午前二 時 手ゴツクの煮魚で濟ます二 竹



都 心 隨 筆

泉 融 々

「むかし、電球の先がとがつてゐたころ……」とか「むかし、新聞に欄外記事のあつたころ……」などいふいひ方で大體その時代がわかるといふ状態は今後あまり永くはつていかないであらう。ちよつと淋しいやうな氣がする「コリント・ゲイムの全盛時代」「ペイ・ゴルフ華やかなりし頃」「猫も杓子もクロス・ワアツに夢中になつてゐた時分」「ヨオヨオ流行の絶頂のころ」などいへばまだはつきりと、しかもなつかしくその時代が思ひおこされる。

「風をひいたのかい。熱はなすのか。」 「熱はある。」 「それぢや出あるいたりしちや駄目ぢやないか。」 「熱は熱だが平熱だ。まだ生きてる證據にはお蔭で熱があるよ。」 かういふ屁理窟がたゞちにユウモアになるのは、ことばが理窟を超越した發達をしてゐるからである。

時代の變遷とともにいろいろのものが跡方なく消え失せた。團子坂の菊人形、大久保のつじ園、九段下の立ちん坊、月島の渡し船など。消え失せるものは消え失せよ。今後何年かの後には「ス・フがまだひどくもちが悪かつた時分」「テレビのないラヂオだけで満足してゐた時分」「九州から内地へは船で渡つてゐた時代」など、今日を回想する日が來るであらう。

「この雨はやむだらうか。」 「君、むかしから、止まなかつた雨が全體あつたかね。」 この場合屁理窟はそのまゝユウモアである。

夏のある夕方役所の歸りがけにのどがはくのでS果物店の二階のバラアアに入る。片隅のテーブルで先輩のTさんが大きな西瓜を食べてゐる。會釋をしながらそばに坐つてアイス・クリイム(アイスク・リイムではない)を注文する。

上田廣君の建設戦記につきの一節がある。

「私は先頭を黙つて歩き、兵隊も皆黙々といつてくる。私はふと、この同じ道を歩いたことがあるやうな記憶に捉はれる。いくら行つてもつきない緒土の新開道、燦々とふりそぐ太陽、注意すれば草

事後家
汚れたる襟も我慢し二等後
家 同 北海

(16) 熨斗

★熨斗は紙製で、進物品に添へて贈答の意を表するの用に用ひてゐる。

★しかし、香奠や香奠返へしの如き不幸な時の進物には、一切用ひないならはしとなつてゐる。

★手許に熨斗のない場合や、極く簡単な進物の場合には、筆でのしと書いて、熨斗の代用としてゐる。又進物品の包紙やポチ袋などには熨斗が印刷されてゐるものもある。

★古代では鮑の肉を平に伸ばして紙のやうに薄くした物を進物品に添へ、それをのしあはびと云つてゐたさうであるが、それがいつの間にか略式になつて、現今の紙製になつてしまつたのである。「のし」は「のしあはび」から轉化したのである。

氣がひけるほど熨斗の幅廣
し アート

物資愛護吉びた熨斗を出し
て来る 同

生綱の皿松もぬれ熨斗もぬ
れ 同 葎 乃

これはどうやとつときの
熨斗を出し 同

アツサリのしと書いてる御
察人 同 路 耶

金一封大きな熨斗をつけて
くれ 同

熨斗入れることも迷ふ新
世帯 同

二度の勤め熨斗をめぐつた
あとを見せ 同

中から日中だけ鳴く蟲の聲さへ甦る。いつのことでもどこのことか判らない。然し、たしかに私の記憶にはある。」

これによく似た文章は有島武郎の「或る女」の中にも見出される。また露伴や紅葉の小説にもあつたと記憶する。

しかしそれよりも、もつと興味があることは兼好法師の徒然草の第七十一段につきぎの文章があることである。

「又いかなるをりぞ、たゞいま人のいふ事も、目にみゆる物も、我が心のうちも、かゝる事のいつぞや有りしがとおぼえて、いつとはおもしひ出でねども、まさしくありしこゝちするは、わればかりかくおもふにや。」

兼好が今日に生きてゐるとすれば、それはけつして「わればかり」でないといふことを悟つたことであらう。

○ 科學精神の昂揚とともに迷信の撲滅が叫ばれてゐる。結構な話のやうである。だがちよつと待つてもらひたい。千人針は一體どういふことになるのだ。

よのつねの迷信の弊害といふのは人間の活動を阻むところにあるのだ。方角がわるいからといつて必要な旅行をや

め、日がわるいからといつて商機を逸し、相性が悪いからといつて相思の良縁がまともになかつたり等々々。

もしもそれがかへつて人間の活動力を増すものであつたら利益こそあれ何の弊害があらう。迷信全廢の名において千人針の美風を失ふの愚をなすなかれ。

○ 科學者がおつしやる。古來の喰ひ合せと稱するものはみな迷信であると。そしてそれを證明する事實として例へば鰻と青梅の成分をとつて試験管で交ぜ合せても何の毒物も發生しないといふことを強調なさる。

試験管に禍あれ。科學者よ試験管が残念ながらガラス製であり、生きて

身の内臓でできてゐないことを御存知でせうね。

○ 漱石の小説は大衆文學であるといはれる。鴈外の歴史も

のは高等講談だなどといはれてゐる。そ

の内容の興味からいつて、わたくしは必ずしもそれらの説に反對するものではない。

しかし漱石の小説や鴈外のそれは文學として一般の大衆のものよりは遙に高い存在であり、況んや講談などと同列に論ずべきものではない。

では何が漱石や鴈外の作品を文學として價値づけてゐるか。何がそれらを大衆ものや講談と區別するのであるか。

わたくしはこの問ひに答へて簡単に「人」であるといひたい。作者の「人」がちがふのである。その人の全人格、全

教養が作品のなかにとけ込んで光を興へてゐるのである。

豆ニユース

★第二次近衛内閣總辭職(七月十六日)

★一圓の豆債券(第一回特別國債券)が出た。従來と違ふ點は煙草小賣店からも賣出されたことである。(七月十五日)

★第三次近衛内閣成立(七月十八日)

★文學博士伊原青々園氏逝去、享年七十二歳。(七月廿六日)

★小説家加能作次郎氏逝去。(八月五日)

★詩人タゴール翁逝く享年八十一歳。(八月七日)

★「愛婦」「國婦」「聯婦」の三團體の名稱が「大日本婦人會」と決定した。今度の略稱は「大婦」か。大婦はユーモア味が漂ふ。(八月十五日)

★長谷川時雨女史永眠、六十三歳。(八月廿二日)

★アルミ貨の十錢、五錢が量目の節約で薄くなるさうだが、天保錢の重量を思うと隔世の觀がある。

書きよい
錆びにくい
強い
廉價い

新裝バンフレット
御申越次第造呈

大坂 式機社 井商店

武玉川四編研究 (三三)

梅 本 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

(535) 矢矧て聲の替るうし若

省二 『琴瓜でかゝれて通ふ御曹子』牛若が奥州下向の途すがら、矢矧の長者金高の娘淨瑠璃姫と契る。別れに臨み薄墨なる名笛を贈らぬ。姫は世をはかなみ菅根川に投じ死す此物語は色々仕組まれ、姫の貞節を讃へて居る。「聲の替る」は聲替りの意で、技巧として見つけどころなのである。

東魚 現今の流で云へば、春に目醒めたと云ふわけ。

塵山 當時牛若は十六歳であつたとか。聲變りには少し時期が遅いやうである。

(536) 地獄の薪のひる齋日

省二 盆正月の十六日のみは、鬼も罪人を免し呵責せずといふ。地獄の釜も休む。

東魚 「のびる」は日を延べる意か。齋日一日焚くを休むので蓋は開かない。

塵山 薪の使用が延びるのである。

(537) 弘法の五筆ハ冬の日也鳥

省二 弘法大師を五筆和尚と稱した。口四支に筆をとり壁にとびつき、眞草の書を五くだりも書いたといふ。「冬の日」とは冬籠での仕業ならむとの意か。

東魚 そんなに一所くたに書くのは、冬の短日故だとの氣分ではないか。

塵山 五筆を揮つたのは、支那の何處かであつて、冬籠の樂書きではない。

省二 「水鏡」に弘法大師の事が記されて、御手ならびなく書かせ給ひしかば、唐土にても御殿のかへの二間侍るなるに、義之といひし手かきの物を書きたりけるが、年久しくなりてくづれにければ、又改められてのち、大師に書きたまへと唐土の御門申し給ひければ、五つの筆を御口左右の御足手にとりて、壁に飛びつきて、一度に五くだりになむ書き給ひけるとある。五筆に就ては「桂林漫録」を始め隨筆本に色々説が載せられてある。

(538) 深草ハあたこか有て口を過

省二 深草では土器を作る。「人倫訓蒙圖彙」に、都は嵯峨、旗枝、深草里につくるとあり、「日本山海名物圖會」には、人皇二十二代雄略天皇十七年に土師連吾筥と云土器の細工人を山城國伏見村に置く、由國史に見えたり、其時の細工人今の世まで傳りて云々。愛宕は土器投げを娛しむだ。「都名所圖會」に、坂路の茶屋に休らへば白雲目の前に横ふ、あるひは土器なげに興じて足の重きを忘る。深草にとつては、お得意先だ。東魚 贊。理窟めくやうだが、打興じた心持はとれる。

塵山 江戸ならば、今戸と道灌山である。

省二 道灌山も飛鳥山も昔咄となつてしまつたが、愛宕は今日でもやる。比叡山にも土器投の設備があつた。京都市の中心は煤煙で焼物に支障がある處から、深草方面が段々發展しつゝある。「あつき日や名も深草の土器師」(園芝)。「愛宕から土器町へほととぎす」(珪琳)

(539) 布圖懸れハあまる山伏

省二 雲に起臥する山伏は、強健にして大男が多かつた。普通の布圖は小さい。

東魚 可笑味がある。脚がぬつと出る。

塵山 天狗のやうな大山伏であらう。

(540) 臺所から這入年神

省二 歳德神を年の始に、惠方棚に供物し祀る。臺所から這入つてくれるならば、不勝手向まことに有難いわけだ。(陰陽家の信仰する神で頗利養女の事。八將神の母、龍王の妻、「若我婆利養女をや釣り玉ふ」(一遊))

東魚 臺所からと云ふので、一層神も親しい氣がされる。

塵山 我國の年神として祀るは、大歲神であつて、松を立てたる門より、堂々と來られるのである。

省二 『年徳の神の鳥居か門の松』(立圃)

(541) 橋に付て鼠もかうはしき

省二 古人は橋を非常に愛賞し、盗まれぬように番人を置いたといふ香氣を好むだもの、だから新春には注連や蓬菜に飾つた。その橋をかじるとは、いたづら者なれど、香ばしき鼠とはなるであらう。

東魚 橋の香を強調して、鼠を描出したところが奇抜である。

塵山 新年の蓬菜飾の橋で、後世には柑子蜜柑が用ひられた。猫に梅が香のやうに、鼠に橋の香は宜い配合である。

(542) 新地の三日誓文か利く

東魚 〓 新地の遊び場の開いたほんの當座は好奇の心から女の誓文も、眞らしくうけいれられるとでも云ふのか。

塵山 〓 假宅の情景かとも思はれる
省二 〓 判らぬ。新地では三日位は誓文の利益があるとではないか。

(543) 黒髪に味に居直る關の前

東魚 〓 様子ありげに居すまむを直す女。關守の甘い處へつけ込んだ氣味ではないか。

塵山 〓 現代の股旅小説などに出る楠卷きの姐御らしく思はれる。

省二 〓 海千山千。

(544) 蓮に雨の音も傘

東魚 〓 蓮の葉を叩く雨の音も、傘を叩く雨音と同じ。

塵山 〓 此の下には蛙が潜む。
省二 〓 大粒な驟雨。俳句に『蓮の葉や水無月ならぬ雨の音』(蓼太)。『花よりも一雨きかせ蓮の音』(乙由)。

(545) 孝行のたとへにも出る五月星

東魚 〓 梅雨空の星の如く、誠に稀だと云ふ意かとも思ふ。

塵山 〓 「たとへにも出る」は、「たとへにもなる」と云ふ可きであらう。

省二 〓 前句事情で「にも出る」であつたのであらう。

(546) 後帯最う笑れる年に成

東魚 〓 相當年配の人妻は、前帯の方

方が似つかはしいと云ふ心持ち。

塵山 〓 現代では前帯が全く廢れた故此句は現代人に解釋が出来まい。

省二 〓 現代式の考察かもしれぬが前帯といふものは妙な格好だと思ふ。後帯が釣合がある。

(547) 牡丹八人の町人てなし

省二 〓 牡丹は百花の王とか富貴草と稱せらる。人に譬ふれば町人でない。並々の者でなからう。

東魚 〓 人にしてみれば、貴人の面影と云ふのであらう。

塵山 〓 百花の王である故、町人でないのである。

(548) 行者の供の照るにからかさ

省二 〓 供が照つて居るのに傘を持つてゆく。行者は常に用意周到だ、とでもいふのか。

東魚 〓 雨乞ひにでも行く場合にも考へられる。さすればヤマ師らしい氣分が可笑味を感じさせる。

塵山 〓 行者にも種々あらうが、此の句のは如何なる行者歟。

(549) 天道へ丸未練なく降

省二 〓 「丸」は船名に附けるから、天道丸といふ船があるのかも知れぬが、天道船の事として解してみる。

濃登船、傳道船など、かき過書船に類するもの、廿石から六十石迄位な小船で、淀川通にも用ひられたといふ。さすれば此句も淀川通ひとして

未練なく降りつゞくので旅客が難儀をする。「和漢三才圖會」に天舳舟、似過書舟而小。可載二百斛。是亦通

淀川也、字彙所謂狹而長、二百斛名初者、此舟之類乎。

東魚 〓 前説の如くであらう。まぎ

降る夏の雨を想ふ。

塵山 〓 雄大な光景が想像される。

(550) 年ほどに盛あてかふ黄八丈

東魚 〓 流行の黄八丈、似合ふ年頃を流行柄だけに、一層ひき立たす心持ち。

塵山 〓 年頃の下町娘の小袖であらう。

省二 〓 盛あてかふは面白い言葉だ。

(551) 投ても物の届く堀川

東魚 〓 京の堀川であらう。川と云つても狭いものである事を軽く興じたもの。

塵山 〓 賛成。

省二 〓 幼時ナゴヤに育つ。清正の工事せしといふ堀川に於て、此句通りの經驗をもつ。

(552) 野暮の返辭の立派過たり

東魚 〓 曲もない人物の事過ぎた馬鹿氣な程の大きな聲で返辭をしたのであらう。(或は口説いたのを、はねつけた場合か。)

塵山 〓 眞操な後家の返事らしい。

省二 〓 さよう。堂々とはねつけたらしい。

(553) 此君の子とハ思へと盜けり

省二 〓 此君とは竹の事。即ち筍を盗むので、言葉の上の洒落ならむ。「世説」に、王子猷、常覽寄人空宅住、便令植竹、或問覽住何煩爾、王嘯詠良久直指竹曰、何可一日無此君。

東魚 〓 此君の子で君子の意を句はして居る。君子に對し盜むといふ事はふさはしからぬと興じた心持。

塵山 〓 技巧を弄し過ぎた句と思ふ

武玉川四編研究正誤表(二二一號)

(頁)(段)(行)(誤)(正)

十五 二 廿八 魚二 省

大阪名物 本舖 松前屋

出店 朝日ビル 専門大店

松前屋 (四六番)

布袋 (八二〇番)

出店 朝日ビル 専門大店

松前屋 (四六番)

布袋 (八二〇番)

塔柳川



—選郎路—

大阪橋本緑雨

兵庫縣奥村丹路

張家口岩崎柳路

松並木昔を偲ぶ馬車が来る
 轉業と決めて二人で働く氣
 上陸に異國風景に氣がとられ
 西瓜一つへ親も子も並ばされ

戀もなく朝な夕なの定期券
 芥箱の位置を直して日が暮れる
 しらふと河合喜多村齡をとり
 てのひらになほうつくしき金魚の死

南への憧れ (三句)
 星月夜海南島は涼しかる
 スコールの晴れ間南支のロケーション
 南國の何處から來たか燕ろよ

瀬戸内海にて (二句)

仰向いて見たるキャビンの救命具
 戀人でも居そうな島の灯がちらり
 銅錢のタイルへ落ちた派手な音
 支那さんに封筒の上書頼まれる
 もう五時だビール列へならぼうか

手なづけて居たのに何日か逃げた鳩

ハイ 高澤一浪

空ボケト妻の愚痴でも聞いてやる
何んにするつもり學歴聞く女

國境も民族もない馬鹿話
身投げした女百弗札をもち
腹の子の父は時めく人なれど

人殺し高が一弗だけのこと
ひかれ行く人を笑ひぬ石の門
氣に入つた膝に忙中閑があり

前身は兎に角晴れて呼捨てる
日露戦從軍愚弟續松の計に接し (二句)

極樂の父に功記と言ふ土産
墓に彫る功六級で足る文字

大阪戸田孤篷

一滴の酒なく紫檀の卓で讀む
手術衣を着ると憶病ものでなし

一發落下それから議論やり給へ
また新語母上をまたまごつかせ

「海軍省貸下」軍艦マーチ唱ひたし

兵庫縣川西町 戸倉普天

厄年に國民服の贈り物

ツバメ號辨當携帶乗車

手辨當いらぬ遠慮と思へども
洋傘持つて來れば東京晴れて居り

食糧増産隣りもひよこの聲がする
キングから借りた智慧とは仰しやらず

大阪府高石町 米本貴志子

枇杷の種ころく見合の中に落ち
理窟では叶はず寄附は引下り

出征の留守姑も血が通ひ
女史代表めがね洋服外國語

女史代表めがね洋服外國語

兒が征つて兵隊さんよ暑からふ
割り切れぬ世の中じやもの晝寝する

兵庫縣 水谷 鮎美

出世してなほもはちまき取らぬ夜ぞ

子々の流されてゐる寂しさよ
冷房のなかにせはしき女店員

今治月 原 宵明

佗住居もう五月の腹である
子がみんなしやぶつた母のあばらなる

迎火へこんな大きくなりました
ノータイと下駄で通へる平社員

郷里があり毎年脚氣して戻り
足で蚊を拂つて長い電話なり

丹精のトマトほゝすき程になり
代書屋の暇を印肉ねり直し

大牟田 高田 抱逸

慾々々此處は賠償係室
令狀へ裸を妻に検てもらい

資源愛護社でも古ペン引替へる
言ひ勝つた日の釣糸が又切れる

下關國 弘 半休

朝顔の出来へ上衣をとつたまゝ
隣組助けられてるのがこわく

金よりもやはり若さがものを謂ひ
眞實に餓ゑし歌妓の素顔の暗さ

大阪 道廣 世紀彦

この家に人に過ぎたる廣辭林
散文のやうな社會に生き生きて

帳場曰くどうせ大阪者だらう
二階借蚊取線香がきらひなり

姫路 岩崎 水虹

悪友はつまり話が上手すぎ

たしなみの深さを見せる沈黙さ
おごる氣で来た二次會で腹を立て
拾ひ屋の稽古ではない採集だ
保険金かける女のロマンチズム

大阪 阿萬 萬的

まだ働けそうなの乞食に敵意感じたり
扇しづかに支那の唄流る

くどく云ふ母親の齡考へる
君あれで水母は生きてゐるんだよ

髪染めた母へ不満を感じる日
思ひ煩ふ勿れと聖書説く眸

大阪 青柳 扇子仙

人を相手にせずと清貧たのしく居
まごゝろは母に及ばぬわれと知る

藝術を愛しかしづく妻と居る
末弟へ

尼崎 小林 文月

教へ子の様に支那兵順ならず
體操を横に眺めて出勤し

お日様わたしや朝顔にて候
ラヂオ體操御苦勞さんと云われてゐる

尼崎 飯尾 寄與史

これからは草鞋男と云ふ誇り
兜巾ちとななめになつた洞の辻

行場にて
六月七日大和天峯山へ登山、蛇谷母子堂これより女人の登山を禁ずる

覗き岩拜めぬままの手を合す
到來物添えて回覽板が来る

京都 野口 柳太

最期の一杯だけ女房酌いで起ち
大陸の月も泣かせる月と知り

大阪 浪 玲之介

大阪 浪 玲之介

猿股の番をして居る泳げぬ子

齋藤瀏先生

天皇に歸一しまつる獄中記

徳島縣穴吹町 姫田夕鐘

支那事變四周年記念日

村社と言へど箒目に變りなし
靜肅に遊びなはれと女將なり
バナマを飛ばしボートを借りるあほらしさ

結構なお住居白帆が二つ三つ
菊鉢で今年は茄子の花が咲き
ついでと行く鮎を見詰めてゐる日傘

男女組先生様は岩田帯
アメリカをはつたと睨む富士があり

大阪須崎豆秋

盃蘭盆(二句)

お團子も代用品を供へけり
◎のお布施なりけりなむあみだ

宮岡白峯

日本刀二度目のトイシかけてゐる
約束の通り女の手紙が來

松本石曾根民郎

盆花のいろふるさとはつゝましや
國護る眉かづ知れず雲ゆくよ

大阪丸尾潮花

ちと足らぬ男の戀にさからはす
連れて來た娘ポラとジョーゼット

送別會サイダイ組に仲居ゐる

大阪岩橋双虎

大掃除仲居の母がゐる日なり
お召ある迄を耳鼻科の齒醫者だの

南君次女安産

さくら咲く國を擲げに生れて來

神戸岡田某人

默禱の目に砲が行く兵が行く
喪の家へ着けば夜更けを開け放ち

朝の驛ぞろぞろぞろぞろぞろ
一徹な男の瞳にうつてゐる炭火
暗い灯へビール瓶の如く坐す

犬と一(二句)

學校へ犬と來てしやがむ夕空
犬と來た學校のゆふやみのたばこ

尼崎酒井斗風

鼻の恰好を氣にしてゐるテロリスト
債券は當らず隣組多忙

勿體なや配給のビール呑み残し
窓際のくらし文學論やめず
二枚舌使ひインテリ哀れなり

大阪北川春巢

市電から巡查一番先に降り
半島の女座席へ巾を取り

常會へ妻を出させて洋書讀む
妾宅の電話を借りる隣組

ありたけの藝をして兒は寝て了ひ
再婚をせよと遺言書いてくれ
すり切れた刺繡の帯で逢うてゐる

歸還勇士米田春童氏に贈る

銃執つた手にバリカンも素直なり

大阪好崎申仙

開いてゐる切戸夕刊のぞくなり

三女博子の死

はかなくも十六時間に花をたむけし
グライダイ畏多くも宮殿下

大阪魚住滿潮

赤蜻蛉深編笠の前うしろ

いのちより大事なものが有る人等

右正に請取左へ拂ふなり

精神鍛錬お米を持つて来いと云ふ

お茶粥の片手は背の蚊を叩き

スポンヂのやうにこの肺洗ひたし

喰いすぎと言はず油の故にする

臥てゐてもやはり要るだけ要るのなり

あるときは地上掃射のよにとんぼ

持駒は知れず五、五、三か五か

日傘一つ眞夏の街を歩んで来

意固地から時勢の波に乗りおくれ

病人の言葉繼いでる看護人

その中に不器用がゐて面白い

一寸名が出て良友と遠く居り

歌舞伎座へ行くに満員バスに揺れ

故郷で病んでるだけが強みなり

一匹の蚊を病人が追へと云ふ

あらそうてくれる人なき病上り

アツパツパイウかつに柄をほめました

何か用ですのとつめたいことをいひ

のりのない浴衣で軍需工は呑み

支那そばの湯氣の向ふは冷しあめ

女事務員の退職上海行を祝して

大阪清水史路
大阪中内翠芳
下關多田市多樓
徳島縣日和佐町濱田賢次
廣島大森風來子
大阪夷一笑

若返へり法丸刈になさいませ

日まわりは天を敬する姿なり

庭下駄もそろへて置いて夕涼

珠數かけた人に電車の席を空け

一年は一年ながらさりながら

香煙のゆらぎのなかに兒は太り

どしやぶりに橋とりかふ岳父の老ひ

話すだけ話せば歸へる御親族

三部經團扇しきりと動いて居

果かなさは夕顔に似し義姉なりき

妻の父地酒をさげて來給へり

大阪は雲の姿の見えぬとこ

仲人はいびきをかくと云はざりき

遠慮なく裸になれぬほど瘦せて

盲目にならぬ男に捧げきり

叱られて猫は一日家出をし

應召に女心の許しけり

女人拂底こんな技が現れぬ

鶴の足あれで地球を押さへて居

母校への小徑を行けば蛙とぶ

科學する心に遠き盆踊り

早熟な娘のスカートが短かくて

いづれ亦第一戦で逢ふ握手

わらべうた西陽がきついで町で聴く

冷房へ鬨争意識失へり

自己喪失かなしきものよサラリは

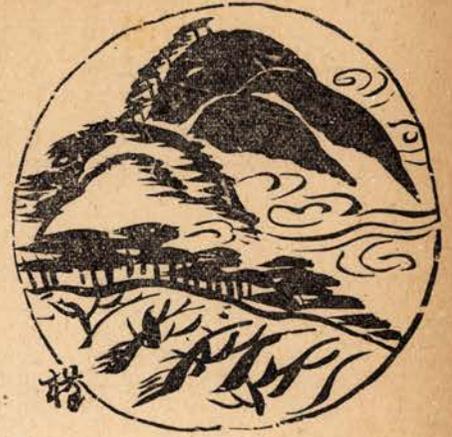
フキルタアをかけてモオパツサンを読む

蚊に喰はれながらポイントの灯をかぞへ

歩く魅力をふつと思ひぬ

あさつゆの厳しさに耐ゆ龍のごと

亡妻一周忌
大津鈴木石鹿
戦地の弟より
大阪津路紅多呂
堺麻生アイト



旅の手紙

—路郎師と共に—

高鷲亞鈍

Y・A様

六月十一日午後八時三十分

只今、やつと赫堂氏宅に落付きました。別府を發つ時から驟雨が降りそぼち、天候を氣遣つてみました。船中もやむことなく、明治時代の作家田山花袋が「草枕」の「松山行」の項にある「伊豫小富士の好景を食り見つゝ、三十分餘にして、松山市の粉壁と、松山城の舊墨、その日光にかゝりやきわたるを見るを得たるなり」と言つた調子の名文で、山の第一印象を飾ることが出来なかつたのが残念です。四高濱の風情を賞す暇もなく、高濱の埠頭に立つたのが、七時五〇分、既に薄闇が迫り、

有難くもない雨がちやん／＼降る中を、曉童さんが尻端折つてうろ／＼と捜してゐるのを見付け、その傘に飛び込めば別に二、三人ばら／＼と先生の濡れた身體を擁ふようにして、兎も角雨露のしのげる屋根の下に走り込みました。そこで僕は御高名は存じ乍ら顔を知らない柳人達と挨拶を交はしましたが、どれが誰やら、誰がどれやら入り交はり立ち代り御辭儀をしたので、その時はさつぱり判りませんでした。後になつて五健、素泉、春秋子、大觀、赫堂、耕一路、南葉の諸氏であつた事を知りました。たゞ、僕は五健氏だけは直感で、ハハんと感付いた、といふのは、で

つぷりと肥つた丸顔に色眼鏡をかけた五十がらみのオッサンが、太鼓腹を突き出して、「いよう、亞鈍さんは筆の方は恐い、顔は案外優しいのー」と言つてニコ／＼笑つて現れたのを見た時、これだ正しく狸の親方五健さんはつ。その儘、一行は伊豫鐵、電車で三十分程乗つて、松山市驛に着き、赫堂氏の宅までの四町ばかりを相合傘で、泥濘の中を歩きました。僕に傘を被せてくれた人は、お釜帽を冠り、都會では紋服の時でないに附けない白い羽織の紐を大きくぶら下げた背丈は僕位の瘦せた黒い一見田舎の若衆でした。僕は二、三傘の下で言葉を交しましたが、このお釜帽は物靜かな言葉で何

かしら餘韻があり、ハテ誰かなく、僕はこの人の名前が知りたくてたまらなかつたのですが、埠頭で一遍挨拶したことになつてゐるから、再び尋ねるやうな無禮も出来ず、氣が／＼りのまゝ、先生達とは道を早廻りして、一足先に二人は赫堂氏の館居を訪れました。二、三分経つて、先生達も來られ皆んなは二階に通されました。やつぱり驛で想像してゐた通り、六尺近い大男のしかもひよ／＼と「人生劇場」の黒馬先生みたいな人が赫堂さんで、正しくこの家の主人でした。ブリツチの高く浮かした、今流行の眼鏡をかけ、鼻から口唇と顎の線がエスカカーブした外人のやうな風貌の持主、赫堂はどうやらアメリカ映畫に出て來るクーバーの、線を細くしたみたいな人でした。

先生は今問はれるままに、五健さんや、曉童、赫堂さん等、周囲の人達に、大阪柳誌統合問題の終結や川柳人協會と川柳協會の關係など詳しく説明してゐられます。驚いた事に五健さんはピースのないバツトを半分位啜へたまゝ腕を組んで靜聽してゐられます。吸うてしまへば又新たにバツトを啜へるんです。啜が火の點いてゐるところまで滲んでゆくのも構はず、ギユツと啜へたまゝ減多に煙草を指に挟んで一服入れるといふことがない。變つてゐるなあ、と僕は珍らしいものを見るやうな氣持でゐます。先生のお話の間に、到頭貴女にお便りを書いてしまひました。(赫堂氏宅)

B・Oに 六月十二日午後四時

昨晚の松山は赫堂氏の私宅に宿めて頂いた。高濱の埠頭では、曉童を先頭に、前田五健氏や矢野赫堂氏(他の人達は誰が誰やら判らん)等々の御出迎を受けた。嫌な雨の中を赫堂氏宅に落付いたのが八時頃、旅館と違つて何となしくつるげる。赫堂の奥さんや、その妹さん達まで、花のやうに美しく、洋装で露はにさせた四肢も白く健康的に延びてゐて、吾々の間を縫ひ乍らいろ／＼御馳走を運んで下さつたのは嬉しかった。この家の主からして大體さうだが田舎じみた空氣がこの家には少しもないのも好ましい。大洲からわざわざやつて來た花房南葉と稱する吞み助を加へて、路郎先生を圍ひ赫堂、曉童などと、盃を乾したが、お蔭で僕は、一遍に友達になつてしまつた。黒づくめの服を着た、ちじれ髪の南葉は大洲

の有力者であり、お金持の御曹子ださうだが、路郎先生の口を借りると都會のチャーターリストタイプのみさくな男であり、僕以上に口の悪い男だ。赫堂も酔へば、たわいのない男で、細長い身體をヘナリ／＼となびかせ乍ら僕の傍に坐り、二つ三つ胸をくねらし曲げて、盞を交したり抱きあつて、頬づりしたりした感じは、お前さんと同じやうな艶面でマツチ箱のやうに横顔が矩形形で廣かつた。

今朝、七時過ぎ眼覺めたら、先生は既に一時間程前から起床されて、僕の軒を伴奏に讀書してゐられた。どうも君達の軒は負けず劣らずの競争で、まるで軒合戦だつたネ。とは朝御飯を招かれてゐる時の先生の話。その裡に前夜、打合せして置いた通り、五健先生は「お早よう」と言つて迎へに來られた。五健さんは昨晩も一滴のお酒も召し上られなかつたが健康の關係で禁酒されてゐるさうである。白石大觀、山本耕一路の兩兄がつゞいて見える。吾々はそこで打揃つて、九時ごろ赫堂居を後に一番町驛から電車で女學校西驛に下車漸く家もまばらな郊外の感じのする田舎道を歩いて、來迎寺の門を漕つた。

墓參は既に先生旅行のプログラムに入つてゐたのである。墓は本堂の裏側を少し上つた小山の中腹にあり、木の香りの未だ失せない墓標には、朝露も漸く消えて、誰人の墨痕になるか公徳院柳譽大樓居士と碑銘が書かれてあり、その裏側には、俗名酒井大樓、昭和十六年五月十八日之建、とあつた。先づ先生は墓の周圍を掃除され、自ら、水を更へられるのを僕達はお手傳ひした。榊を新しく挿し代へ、お線香を立てられてから、先生は墓前に佇まれたまゝ、暫し合掌瞑目された。傍に居る、故人とは生前親友であつた前田五健氏の感懐や如何に、「大樓君よ、大阪から路郎先生がわざわざ來て下さつたぞ、喃、嬉しいぢやらう喃」墓掃除の時に五健さんはさう獨り言のやうに墓碑に話しかけてゐられたのを僕は聴いてゐた。臨終の時に、路郎師から贈られた見舞の林檎汁を、「おい路郎先生から届いた林檎ぢやぞ」と口へ持つて行つたら、大樓氏は、ニツコリ笑つて嬉しさうにス、リましたよ、と五健さんは鼻をつまらされて僕に話された。雲の低く垂れ罩める曇天の下、裏山の緑の驕りに、こゝ地下の故人と再び結

ぶ、師弟の交通を遮ぎる何物もない事を思へば、幽明境を異にするとは雖、大樓氏の靈は今こそ、川柳に生きる多難な路郎師を護つてくれることであらう。僕は路郎師の蹲踞つてゐる背後で、一人、さう信じるのであつた。

そこへ、朝から顔をみせないで氣になつてゐた曉童君が、やれ／＼間に合つたな、と言ひ乍ら麓から上つて來た。今出來上つたばかりの「川柳伊豫」六月號を手にして、早速墓前に供へた。曉童君も生ける人に話す如く「あゝ大樓さん、今雑誌が出來たばかりだよ」と言ひ乍ら、「吾々は先生の後を次ぎ／＼と墓前に手を合はし、何かしら清潔な氣持になつて、來迎寺を辭去してから、一行は道後に向つた。

泉へ來たら必ず子供のやうに泳いだといふことを聴けば、僕も真似して泳いでみたくなり、二三回泳ぎ廻つて、路郎師に笑はれた。

吾々はさつぱりした氣持になつてから五健氏の「狸の話」でお馴染みの富田金鼓堂氏のお宅で小憩した。相憎く主人狸通氏は御不在であつたが、蒐集された大狸、小狸の千種萬態、變幻自在、圓融無碍のところを一望のもとに見せて貰つた。狸の好きな五健氏なら、さぞかし垂涎措く能はざる珍奇なものも數多くあつたらうと思はれる。

道後驛から吾々は電車で後戻りして、市役所前で下車、少し時間に餘裕があるので、正宗寺に立寄り、正岡子規居士、内藤鳴雪翁の埋髪塔へお参りした。但し子規居士は頭髪を埋めたものであるが、鳴雪翁の方は髻を埋めたものであるらしい。正宗寺玄關入口の石碑には子規の「朝寒やたのもと響く内玄關」といふ句が刻まれてあつたが、某人よ、この句はうまいのかね、どうだね。それから松山中之川に在つた正岡氏舊宅の遺材をもつて、俳聖の書齋と書院との遺型をとつた子規堂をみせてもらつたが、その部屋の

中に陳列してある遺品の中で當時の住職、一宿禪師に宛てた真跡を拾ひ讀むと

いづれ俳人はかくの如くにして老ひゆくものとかくこはいたし居り候へ共親しきふるさとの柿の味にくらひては根岸住ひもこれたびする人の心にことならず候

水音のまくらに落つる寒さ哉とあり、晩年の寂寥な生活が判るやうである。

やがて僕達は三時九分の下り列車で大洲行の途上にあつた。右に伊豫灘を眺め、變化に豊んだ海岸線に、岩の起伏も面白く、右は翠巒、重疊の風景を縫うて、一路、汽車は疾る。車中先生は一人席して假睡をとられ、僕は五健氏と向ひあつて、刀劍の話、狸の話など、伺つた。先生から五健氏の柳歴が立派であり、柳壇のよごれに全然染まつてゐない巍然たる態度といひ、而も柳人には珍しく謙讓な人柄など、聴かされてゐたが、成程、話せば話すほど、語れば語るほど、見識、達觀共に備はつた仁である。斯かる人を頭に戴く松山の柳人達の幸はせも亦此の上ない事であらう今、五健氏も別の席に離れ、僕一人になつたので、昨晚のことや、今朝のことなど思ひ浮べて、君に手紙を書きつゞ

聲も一しきり湧き、筆の勢で
椋影氏の似顔畫が、五健さん
の醉筆でさら／＼と描かれ
ば路郎師はそれに賛を書かれ
て椋影氏全くでかしました。

誰か近衛さんみたいだぞと
言へば、成程、背の高い、顔
の長い、チヨボ髭は近衛公の
面影があります。そろ／＼座
も亂れて来るまゝ、五健さんは
椋影さんらにせがまれて、居
合術の型をしてみせれば、い
やあーうおーと、椋影が尻つ
びり腰で、やつてみるのには
笑はせられました。

斯くて昨晚の歓迎句會は、
愉快な餘興もあり、盛會裡に
終りました。今朝これから、
大洲の町を見物して、午後、
今治に向ひます。(小西旅館)

二仲、前便にお登帽の青年のこ
とを書きましたが、これぞ貴女

の作品に傾倒してゐる詩人山本
耕一路氏であつた事を御報告し
ます。

B・Oに 六月十三日午後九時

昨晚の大洲、脇川のはとりの小
西旅館に於ける、歓迎句會は盛
會であつた。今朝は松山から行
動を共にして下さつた五健先生
や、赫堂、耕一路の兩兄に、大
洲在住の椋影氏等と、脇川へり
を散策してその清通を味ひ縣立
大洲中學校校庭にある中江藤樹
先生の邸址及中江の水や、遺愛
の藤を見、至徳院で藤樹先生の
徳を偲んだが、お互ひさまに近
江聖人と言はれた程の親孝行者
の爪の垢でも煎じて飲めば可い
ネ。

それから城山にのぼつて、
中江藤樹鎮座まします銅像に
しやつぽを脱ぎ、歸途、故澤

松異天樓氏の宅を訪ね、山を
下つて大門橋の袂のところまで
忽然と南葉君が出現するや、
葎乃女史と奇しくも同じ、よ
しの壽司を食代りに招ばれ
大洲驛午前十一時廿三分發の
汽車に吾々は乗り込んだ。途
中松山市驛で、五健氏、耕一
路兄が下車し、お別れの挨拶
を交はし、代りに曉童君が、
勇ましいハツビ姿で乗り込ん
で、大洲から附き添つてくれ
てゐる赫堂氏と共に吾々を、
今治まで送つて下さつた。今

治着が、午後二時五〇分、こ
ゝでも驛頭、長野文庫氏を先
頭に十數名の御出迎へを受け
豫定の場所、南洋旅館に落着
く。途中文庫氏のお店で、古
本を拜見して思ひ出した。

今治五時出帆の那智丸に乗り
込むまでの、二時間たらず匆
々の會合で、今治の方々には
甚だお氣毒だが、旅程も一日
遅れてゐる事でもあれば致し
方なく、たゞ先生は、當地方
の柳友にも精しく知られてゐ
ない大阪の柳誌統合問題や、
川柳協會の實狀報告をされた
茶碗の中に磐若湯を忍ばして
呉れて、先生のお話中、僕一
人で飲んでゐた不作法も許し
て戴くと同時に、その親切に
はお前さんも機會があれば、
この人達に禮を言つて置いて
お呉れ。かねて作品の上でも
馴染み深い、谷心府氏や、歸
還勇士の宵明氏、その他向上
庵仙海、角二、地下水、紫陽、
河鹿の諸氏などと柳談を交せ
ば、屹度有益な土産話も出た
だらうが、何分時間もなく、
僕達は出帆ぎり／＼に那智丸
の人となつた。埠頭に見送る

諸兄を更めて見廻せば、印袴
天の人あり、角帯の商人あ
り、寫真機を肩にかけたシイ
クな背廣姿があり、勞働服の
人があり、種々雑多な階級の
人達で、あとで先生と語つた
が、あれを側から見てゐる人
は見送られてゐる先生を一體
何者と思ふでせうか、と言つ
て笑つたが、しかし川柳家路
郎師の生命も川柳自體の民衆
の精神も、階級を超越してひ
たすら斯の道に進む者の同じ
目的に結ばれたものでなくて
何であらう。

さあ、愈々、トラップが船
腹に巻き上げられた。遂に四
國と、その土地の柳友ともお
別れだ。さようなら、善意の
人々よ。とかジュール・ロマ
ンの言葉を借つて、アジユを
告げた。(大阪行那智丸)

さあ、愈々、トラップが船
腹に巻き上げられた。遂に四
國と、その土地の柳友ともお
別れだ。さようなら、善意の
人々よ。とかジュール・ロマ
ンの言葉を借つて、アジユを
告げた。(大阪行那智丸)

戦線
の
勇
士
へ

慰

問

袋

を



大鐵百貨店

き
つ
と
喜
ば
る

近作柳樽

路郎選



迷彩でなし脳病院の赤い屋根 西宮 谷口緑葉
 モーニング真白き徑へ脱いだ晝
 いつの間か氣難見分ける兒となりぬ
 子を連れて電車見に来て蟹を捕る
 交換手引つこむことの早いこと
 自動車の車庫を知つてる背中の兒
 當らずさわらずの手紙を書き疲れ 岡山 生子洋子
栗林公園にて
 水清きあたり寫眞屋寄つて來る
高松三越にて
 屋上に吹き來る風は内海の風
宇野線にて
 蘭の出來を大阪辯で賞めてゐる
 暮るゝ日へ日まはりなほも金に啖く
 唯釣の事だけ風呂で話しとき 和歌山
 休閑地社長の植ゑた甘露も出來
 泡出して金魚水にも飽いた様
 轉業といへど金なく年も年

子供らはカムラン灣をもう覺え 愛媛縣 大洲町 米澤曉明
 代筆をした人母の好きな人
 性分はインキの空も捨てずにお
 御尤もですがと矢張自論なり
 背廣着た少年工は二階借り 和歌山 田島破鼓
 水と油すでにこの土地こと久し
 駄馬叩く如くに足へ灸すえる
 キヤンプ登山わかな過ぎるお父さん 名古屋 八幡勿來
 貨車一輛がんと離され驛暑し
 自活する女マリアの額を掛け
 明治、大正、昭和、本箱のほこり 岡山 本田ユリエ
 貧しき心小説を重ねぬて
 若き會話の窓へよる宵なりし
 歩け、妻は靴下繕ひぬ 大阪 橋本美奈子
 慰問文流行歌詞も書いておき
 藤椅子のきしみも嬉し病後なり
 割算を教へる方が少し倦き 京都 川島諷云兒
 奉公日流石靜かな町曲る

隨想

小山文三

幕末頃の江洲の蚊帳賣りと丹波の袴賣りとは懸値を言ふ事に於て天下に有名であつた。
 伊勢の孤野藩のさる家老の門を潜つた丹波の袴賣りは、京で拾兩で仕入れた袴を恐るゝ五拾兩と吹き掛けたのであつた。
 あまり暮しの豊かでなかつた御家老は貳拾兩位しか融通がつかなかつたので、つい業を煮やして、
 下り居らうと大喝した。
 慾に目のない商人も、さてとなると氣が弱い。此袴賣りも不意の一喝にびつくりして擴げた荷物もそこゝに飛び出して街道筋をひた走りに凡そ十町許りも逃げ延びて、やつと胸撫ぜ下す一休みにもまだ草鞋の足の震ひが止まなかつたのである。
 折柄フト振り返ると
 オイ、袴屋、御用だ待てとの掛聲勇ましく仲間風の男がバラ／＼と駈けて來る氣配に、件の袴賣りは二度びつくり、さては命もこれまでかと又々一生懸命駈け出したが、袴の行李かついで逃げて足はとも仲間共には及びもなく、とう／＼半里許りも行かない内に捕まつてし

話いまクライマツクス窓に月 同
 流行らない醫者の自轉車よく光り 松江 吉岡 遶兒
 進駐は異國の端の端をゆく 同
 家柄が祟りみじめな嫁きおくれ 同
 制服を脱げば一家の戸主であり 松江 村上 四希
 慰問團の中に見つけた菊池寛 同
 殺された人の笑つた寫眞あり 同
 眼鏡屋の分解した眼も並べとき 大阪 松浦 帆船
 線香の燻つてゐる魚の値 同
 僕だけで無かつた遺留品を選び 同
 暗い花などゝ女給は書いてくる 大阪 平井 流舟
 戀愛小説ばかりこの子はませてゐる 同
 この傷は徐州戦でと涼み臺 同
 買溜めでない常會の慰問品 臺中 高山 武士
 汚れてるだけ働いた菜葉服 同
 創刊號高く買ひます夜店の灯 同
 一旗はもうあきらめて土を掘る 布哇 佐田 俚笛
 入植の早五十年孫九人 同
 立志傳みんな一癖持つてゐる 同
 花鈿慰問の廊下匂はせる 布施 岩本 晴美
 空想にフト一圓の五〇〇倍 同
 合成酒灘や伊丹の香を忘れ 同
 たうもろこし官舎の塀を越して伸び 岡山 眞理子
 今頃は半七つあんと老雜務 同
 有り勝ちなことだと笑ふ隣組 大阪 武部 香林坊
 子のことで總立ちになる隣組 同
 スラム街うちの子供が泣いて居る 大阪 後藤 柳風
 墓参り◎ですと花をさし 同

ズボン吊欲しいと思ふ初任給 徳島縣 矢田 壽澄
 西式に首を動かす事務疲れ 同
 うちの子の熱にあわてた小兒科醫 松江市 梅本 登美也
 自轉車で晝は出前をする女給 同
 美辭麗句實意の見えぬ詫手紙 大阪 藤井 昇淵
 席ゆづる横から荷物席を取り 同
 小切手が書ける身分になりました 松江 恒松 湖雪
 女の裸配達さんに見付けられ 同
 坑内出れば小雨内閣總辭職 愛媛縣 角野 町
 油さす人も乗り行く猿機械 同
 檢温器ふつて文學趣味ゆたか 神戸 平川 久枝
 廢品回收令聞様も白だすき 同
 おとろへた父の氣性の哀れなり 廣島縣 竹原 愛鳩
 金魚屋がやつとねついた兒をおこし 竹原町 同
 人妻に色の白さを認められ 大阪 南 要兒
 濁る丈濁つた水の流れやう 同
 黒くなつた黒くなつたと女事務 廣島 福原 麗美
 大まかな愛情ほしと思ふ旅どけの日 同
 手土産をさげねば行けぬ仲なのか 大阪 浪花 駒志希
 人力車昭和の御代のテスファルト 同
 長男出産 同
 君喜んでくれ男の兒が生れ 大阪 富岡 巨人
 闇中に聲あり巡查さんと知れ 同
 アカシヤの茂キアダムとイヴを思ふ 愛ヶ池 三輪 丘董
 支那へ行く包の中の値をきかれ 同
 須磨舞子お腰を干した家があり 姫路 小川 靜觀堂
 南佛印進駐 同
 象の背に日の丸たてゝわれ征かむ 同

まつて元の城代家老の玄關先へ
 つき出されてしまつた。
 やゝあつて御家老職の御出ま
 しに、覺悟をきめた裨賣りは
 命計りは御助けを
 と哀願したのであつたが、落ち
 つき拂つた御家老職の宣く
 其裨は氣に入つた。五拾兩で
 買つて置く、内二十兩は現銀
 に下げ渡す、あとの三十兩は
 次に廻つて来る迄貸して置く
 これを聞いた裨賣りは三度目
 の大ビツクリ命冥加の其上に、
 商賣冥加の有難サが加はつて小
 躍りして喜んだと言ふ實話があ
 る。
 昔の武士の一徹と、町人の根
 生とはコンナに嘘の様な現實を
 あからさまに示してゐるのであ
 る。

冊短もすて和正堂
和正堂
 大電 大阪 心齋橋 二丁目 二番
 電話 南七二五番

○ 次は明治三十年前後の事であ
 る。幡州の三木町や山城伏見の
 大鋸―俗に言ふ前曳と云ふ木挽
 職の使ふ鋸の話である。
 但馬の妙見山は谷深く、妙見
 杉の名も高い。當時の木挽職は
 人里はなれた此山奥で、前曳鋸

戦車みな潰して子供寝て了ひ大阪 永田六龍子
日本の有難さ水槽は空なり同
節を想ひ放哉を想ひ吸入器廣島縣 竹原町 西野みづほ

丸刈となる

應召と違ふ丸刈あはれなり 同

夏草へ強者共の勢揃ひ北支 宇敷桃水

ビール一本ぬくにも友のほしかりき 同

屋上のこゝも寫眞はとれませ兵庫縣 魚崎町 谷口寒草

青年詩人今戀文の封を切る 同

いさかひの夫婦互の夢強く堺 徳岡澄人

斷髪の娼婦の蒼き肌鈍し 同

朝の陽が目にしゆむ今日は休みです大阪 前川不味公

自尊心淋しい嘘をつきました 同

幹事長ナチスの押しにちとあはて愛媛縣 大洲町 武田京司

實力の前に議論の餘地もなし 同

おばあさん好きとぢいやはいやが大阪 保田呆人

可愛がりすぎると父が苦情云ひ 同

孤獨感語らぬ主の太き指京城府 奥津啓一朗

軍事便坐り替えたる膝にあり 同

せがむ子が無くて忙しい夏祭大阪 堀毛一龜

時變下の不用の品が目にあまり 同

裏街へ公益質屋派手に建ち鳥根 田中弘樓

隣組今夜の風呂はうちで焚く 同

大阪にて

満員にすぐあきらめる母とある松江 本庄快哉

眼帯の妻は美しさを戻し 同

錢金を言はず研がしてほしい刀大阪 榊岡詩朗

血迷へば保険ほしきの首もつり 同

歩きながら紙幣を数へてプロカー大阪 有馬千斗

筆まめな逢へば無口の女なり 同

燦然と指にあるのは舊體制大阪 吉川琴聲

方針もなく大陸が好きと言ふ 同

休閒地わけのわからぬものも生え松江 沖原緑風

故郷の家一望の青田なり 同

他人の事なのに母さん苦勞性名古屋 松井静子

還らない覺悟の髪が包まれる布施 上田翠光

ニユース今戦車入城する所大牟田 園田初舟

覺えある柄のおしめと母が来る兵庫縣 上沼芥舟

空財布これも一個の資源なり松本 西藤義春

赤んぼは抱きたし母になりとなし大阪 中野延枝

子が皆な集まるまでの西瓜の命愛媛縣 松前町 佐伯鶏城

拔擢をされて小遣不足がち大阪 山本葉光

樂しく泳いだ日曜で死んだ子よ大阪 秋星

あまりにも暇の父がお金持京都 小坂ふじ彌

馬鹿馬鹿を覺えて可愛さ又一つ大連 中村對州坊

積極の父へ消極母和合堺 野島神樂

迷子へ隣組して世話を焼き神戸 市川治男

やあと着流で先生の如才なさ奥 大内紅芽子

趣味持てばむらさき色に街暮れる松江 石原松江子

就職の窓で冷たい言をき尼崎 奥田綠翠

百合の花ふと戦盲をたぐませ神奈川 藤原町 尾崎保柳

空閑地もういつばしの園藝家岐阜 藤井紫朗

僕に妻のある事知つた女事務大阪 佐野牛歩

連れ子して嫁くも女の渡る道大阪 中西彌生

病には矢張り博士も勝てぬのか大牟田 富田一葉

いつか白日も枝折經を置けり夜松山 山本耕一路

を曳いて杉板を造り、秋から冬への二三ヶ月をこの山奥の掛小屋に孤獨無邊の生活を送るのであった。

訪ふものは年に一度の鋸賣りと鋸賣りだけである。利に鈍い鋸屋は三木や伏見で仕入れた大鋸の二三枚を背負つて、この山奥の木挽小屋から小屋へと雪深い谷を越へ、山を上つて大鋸を賣つたり、鋸の目立てを稼いだり中古鋸を交換したりして渡り歩くのであつた。

一日歩いて一小屋が訪へるか訪へないかの悠々たるもの。もとより宿屋のあらう道理もなく、行き着いた木挽小屋で、炊事を手傳つたりして泊めて貰ふのである。

御得意の木挽さんと心易くなつても、儲ける事に掛けては義理なぞ構つて居られないのが鋸屋の本性である。

「業は九層倍、百姓は百層倍、折れて曲るが金物屋」の諺へも道理、丁型に折れて曲つても鋸屋だけはコの字型に儲からないと我慢が出来なかつたらしい。

拾圓の大鋸を三十圓に賣つて二十圓を即金にあとの拾圓を次の廻りに拂つて貰ふ位は當然だつたらしい。

甚だしいのは元値の倍の二十圓に賣つてやる代りに去年賣つた中古の鋸を貰つて来て、次の小屋でこれを拾五圓に賣つた等まるで只取りのボロ儲けもあつたらしい。

こんな昔の夢の醒めやらぬ古老に、經濟機構革新論を聞かせても、それが判る筈もないのであらう。



土舟に乗せられた狸の最後はあまりにも善根悪根の偶話に徹底して哀れだが、
うっかりと乗つたは狸不了蘭の古川柳のように同情されると却つてお伽噺を聞く子供は承知しないに違ひない。しかも私たちの子供の頃に於けると同じである答

どなとこの狸

★ ★ ★ 石曾根民郎 ★ ★ ★

と思はれる。狸はどうしても土舟に誘はれて沈んで行つてもらはぬと話がかぬのだ。そこに狸の宿命があり日本の傳説の流れがあるを考へられる。
ひとりの博徒がふとしたことから、狸の化けたさいころを手に入れる。彼の思つてゐる通り賽の目が出るので、至極調子がよい。

ある時隣家の婚禮に祝物として鯛に化けて貰ふが、いざ臺所で料理されることになると、急に跳ね出して床下へ滑り落ちてしまふ。狸もほと／＼無理な注文になつてから八疊敷を披露に及ぶ。なか／＼素晴らしい青盤を敷き詰めた座敷になるけれど、彼が何の気なしに煙草の喫殻を落すので、ジヤと音がして座敷は忽ち消えて、たゞひとり廣い野原の真中に座はつてゐる自分を知つたといふ。
觸ると温かて柔かいモジヤム、した袋のようなものを拾ふが、これが、前の話とおなじく、いふがまゝのものになつてくれる。最後に八疊敷を所望すると立派な座敷になるが、なかにひとつ變な括り目のあるのを氣にして、針の尖でチョイト突くと、ジヤと音がしてもとの毛だらけの役に立たぬ變な物になつてしまつたといふ。これほどどちらも三河地方にある昔話である。

それから一軒の家に辿りつく。一夜の宿を乞ふと、家のなかに女がひとりゐてサア／＼泊つておくれといふので、小間物屋は泊めてもらふことにした。圍爐裏端で當つてゐると、女が針はないかといふ。針ならいくらでもある、これはどうだ。こりや細過ぎると女がいふので、その針を薙へチクリと刺すと痛いとながいつた。次に少し大きな針を見せるとこれも氣に入らぬ。その針も薙へ刺すと女がア痛といふので、これは怪しいと氣がつく。大きな太い針も女には駄目だつたが、薙へ刺すと前とおなじようにア痛いたといふ。小間物屋はこの針をしつかと握つて、薙へツボリン／＼と方一杯に刺すと、キヤン／＼といふ悲鳴が忽ち響くと一しよに、女の姿も家の影も消え失せ、小間物屋は真暗な山のなかにひとり坐つてゐた。夜が明けて見ると狸がうん／＼唸り痛がつてゐたといふ。私たちの住む信濃に傳はる昔話だつた。
古川柳に
罌丸が二疊敷ある狸の子
といふのがある。理窟つばい句だ。

處へ借りやらうか」といへば、息狐が「とつさん金屏風なら狸の所へ借りにおやりなさいまし」と
昭和二年型一〇繪頭
説明をしなくとも自ら微笑を禁じ得ないユーモラスなポイントを掴むことと思ふ。
○
狸人が狸狩に出ると、女狸が尻に化けて殺生の罪なことを諷める。狸人は一旦思ひ止つたが、様子が変わるので浮かれて歸る尼のあとをたづね、狸に化かされてゐたことを知つて射たうとする。狸が命乞ひをするので、腹鼓をすれば許すといふと、狸はしきりに浮かれて出す。狸人も何となく浮かれてゆく。これは能狂言にあつた。
拍子にも合はぬ狸の腹鼓の句や
入すまで鐘も音せぬ古寺に
狸のみこそ鼓うちけれ
の歌のように、古くから狸が月夜に腹をたゞき鳴らして興じたことを記してゐる。いまでも子供たちが證城寺の狸噺といふ童話を歌つてゐるほど、狸の飄逸な姿態は子供ごころに親しい深い印象を残しゆくのである。
深山で小屋掛けをし泊つてゐると、小屋のすぐ傍の森の中などで、どどどん、どどどんと太鼓のような音が聞えることがあるが、これは狸の太鼓だと謂つてゐる。そんな音がすると、二三日後には必ず山が荒れるぞうだ。或ひは雨の降る晩などに、ポドポドと聞えるのはやはり狸の腹鼓とも老は話してゐる。狸が自分の腹を打つところを頭のなかで描くと、全く滑稽で可愛い感じがこみあげてくるものである。
伊豫の松山の女達磨、鏝入形、姉様、土佐高知の相合傘など、共に私は讃哉高松の禿狸を持つてゐる。やはり高松の張子のほうこそ、土人形の鋼狎の郷土玩具と一しよに書棚に並べられたこの起上りの禿狸はちと稚拙のように思はれる。腹鼓をうつ飄逸な狸の郷土玩具であつてほしいものといつても眺めては四國のくにぐにへ遙かな想ひを走らしてゐるのである。(終)

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎午前
加藤謙一
佐多愛彦
螺長四郎
院醫多佐
入西辻北所留停町中島堂電市
四八二八北電 町北島堂成大



吟行地 奈良篇 (七)

麻生路郎

(32) 南園堂

★南園堂は西國三十三箇所第九番の札所で、三重塔の東側の石段を登るとすぐ右手にある。

★八角の圓堂で、本尊は不空網索觀音である。堂は弘仁四年に藤原冬嗣が子孫繁榮の祈願のために創建したもので現在の堂は寛保元年の再建である。御詠歌は

春の日は南園堂に輝きて
三笠の山にはるゝ薄雲
である。

★南園堂を詠む。

一門の藥華法施の堂となり

南園堂冬嗣の名が残るだけ

(33) 花の松

路 耶

★花の松は興福寺の東金堂前にあつた大松のことで、周圍が三間、高さ十四間、枝の廣がり東西十八間、南北十二間で奈良公園第一の松であつたさうであるが、この名松も今では枯死して二代目の松が植ゑられてある。

★花の松といふ名の由来は昔、弘法大師が手向けの花として植ゑられたので、さう呼ばれてゐるのださうだ。この大木の脚を奈良の南の添上郡東市村古市の廣瀬といふ人が維新前まで毎年寄進してゐたので、古市の方角へ向つてばかり枝が伸びてゐたといふ傳説があるが、それは寄進した人への讃辭に過ぎないであらう。

(34) 猿澤池

路 耶

★猿澤池は奈良公園の入口で、三條通りの南側にある。

★元は興福寺の放生池で、印度の那蘭陀寺の獼猴池に模したもので、東西五十間、南北四十間、周圍百八十六間の池である。鯉・緋鯉・龜等が多數雜居し、俗に水三分に魚七分と云はれてゐる。

★古川柳

憐なる柳猿澤隅田川

は東岸にある衣掛柳を詠んだものである。隅田川は愛子梅若丸を尋ねて都から東に下つた狂女のこと、憐なる柳の對比である。

★猿澤池を詠んだ句では

こゝへ衣かけよと柳青ちし
か 葎乃
猿澤の池で通路にまた出會
ひ 白面人
ゆびさすは衣掛柳旅人の
學童へ水が三分に魚七分

(35) 十三鐘

同 耶

★十三鐘は猿澤池の東二丁餘の所にある南面した堂で、菩提院大御堂の俗稱である。

本尊は阿彌陀如來で、石子詰の古跡として名高い。

★石子詰の址は大御堂の左前にあつて土墳の上に二株の古楓が植ゑてある。

昔十三になる稚兒が過つて春日の神鹿を殺し、こゝに六つの鐘と七つの鐘とを合圖に石子詰の刑に處せられたのだといふ。

★石子詰を詠む。

石子詰鹿の歴史とともに古
り 路 耶
石子詰殘つた鹿の知らぬこ
と

(36) 采女社

同 耶

★采女社は猿澤の池の西北の岸に面した小社であるが、道路を隔てて池に背を向け、西向きに立ち、背後に鳥居があり、扉には鍵が掛けてある社の北側は道路に面し、西隣と南隣は人家に接してゐるので、何處からも這入れない。

★「大和の傳説」によると

「昔、奈良のみかどに仕へた采女といふ美人があつた。お目にとまつて、一度みかどに召されたが、どうしたものか其の後は召されなかつた。采女は世を果敢なく思ひ、猿澤の池に身を投げた。其の時、衣を掛けておいたのが、東岸の衣掛柳である。みかどは、深く哀れに思召され、池にみ

ゆきし給ひ、

猿澤の池藻つらしなわきもこが
玉藻かづかば水ぞひなよし
と詠ませ給ひ、人々の歌を召された。

柿本人丸の歌に

わきもこがねくたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるぞかなしき
其の後、西岸に采女の社を建てられた。初めは池に向つて社殿を設けられたのに、みづから命を落した水面を見るのは恨めしいとあつて、一夜の中にクルリと西向きになつてしまつたのだと云ふ」とある。

★語の「采女」はこの傳説から作つたのかも知れない。次に一寸紹介しよう。シテ采女（前へ里女）、ワキ僧。
シテ詞、如何に申し候ふ、猿澤の池とて隠れなき名池の候ふを御覽せられて候ふか、
ワキ詞、承り及びたる名池にて候ふ御教へ候へ、シテ「此方へ御出で候へ、是こそ猿澤の池にて候へ、又思ふ子細の候へば、此の池の邊にて、御經を讀み佛事をなして賜はり候へ、ワキ、やすき間の事佛事をばなし申すべし、扱て誰と志して廻向申し候ふべき、シテ、是は昔し采女と申しし人、此の池に身を投げ空しくなりしなり、されば天の帝の御歌に

吾妹子が寝ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しきと、詠める歌の心をば、知ろし召され候はずや、ワキ「實に〜」此の歌は承はり及びたるやうに候ふ、委しく御物語り候へシテ「昔し天の帝の御時に、一人の采女ありしが、采女とは君に仕へし上童なり、始めは寂慮浅からざりしが、程なく御心變はりしを、及ばずながら君を恨み参らせて、此の池に身を投げ空しくなりしなりワキ「實に〜」我れも聞き及びしは、帝あはれと思し召し此の猿澤に御幸なつて、シテ、采女が死骸を寂慮あれば、ワキ「さしもさばかり美しくかりし、シテ「翡翠の簪嬋娟の鬢、ワキ「桂の黛、シテ「丹花の唇、ワキ「柔和の姿引き替へて二人」池の藻屑に亂れ浮くを、君もあはれと思し召して、地「わぎもこが、寝ぐたれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しきと、寂慮にかけし御情、かたじけなやな下として、君を恨みしはかなさは、たとへば及びなき水の月取る猿澤の生ける身と思すかや、我れは采女の幽霊とて、池水に入りけり、池水の底に入りけり」この語の文句に「昔し天の帝の御時に、一人の采女あ

りしが、采女とは、君に仕へし上童なり云々」とある如く一女性の名ではなく、一種の職名である。

萬葉集の藤原鎌子の歌に、

采女安見兒を娶る時

吾はもや安見兒得たり皆ひとの得がてにすといふ安見兒得たり

といふのがあるが、この前書にある采女といふのも次ぎに述べる職名としての采女であると思ふ。

傳説に柿本人丸の歌として發表されてゐる「わぎもこが寝ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるぞかなしき」が萬葉集の柿本人丸の歌の中にあるかと思つて、探して見たが見あたらなかつた。謠の中では、この歌が帝の詠ませられたものとなつてゐる點などから考察しても、それ等の歌は、この物語を美化させるため誰かが後年の作であらう、と思はれる。

★こゝで采女といふ職名について少しく書いて見たい。遠く奈良朝時代には唐の妓制にならつて宮中に采女部を置いて、その司を采女正と云ひ、諸國に賦課して容姿端麗の美女をあつめ、これを采女と云つて専ら内膳のことにあ

づからしたのであるが、その實は唐の官妓が酒宴大饗の興を助け、又外賓功臣を接待したやうに、唐其の他の使臣が來朝したときにその接待に當り、旅愁を慰むるに置かれた官妓であつて民間の娼婦に等しい行爲をさせられてゐたのである。

斯うして采女の正體を洗つて見ると傳説は矢張り傳説でしかあり得ないが、唐の使臣に接した女が猿澤の池に身投げしたのを尾に踏つけて脚色したのだと解してもいゝだらう。

★しかし、現存の采女社は鳥居が背後にあつたり、扉に鍵をかけてあつたり、賽銭箱が横手にあつて、賽銭を入れることが出来ないなど、いかに女の神様にしても變な神様である。クルリと西を向かれる時に賽銭箱を忘れないで動かされたのだとしたら、微笑を禁じ得ないではないか。

★古川柳に

ふられ者采女の宮て夜をあかし

といふのがあるところを見ると、鍵を掛けて境内へ這入れないやうにしたのは後年のことであらうが、何故鍵を掛けたかは不明である。

ふることき采女の宮と木辻町

といふ句もある。

この句から察するに、いかにそれが職務とは云ひながら外國人に身をまかせることを毛嫌ひして相當にふつたのがゐたのかも知れない。それは木辻の遊女と同様であつたらう。この句は木辻の遊女が客をふることを采女の宮だと云うのだと解説された本も見たが、さうした言葉が實際行はれてゐたか、どうだか知らない。木辻といふのは采女社から數町南にあたる奈良の遊廓である。

猿澤の池の土左衛門うつくしい

こんな句もある。采女を詠んだ句である。

大一座木辻は能のかへりなり

の句もある。これは興福寺の薪能を見ての歸りが、木辻へ流れたことを云つたのである。さてもぬつたり下女丹花の唇

は、單に下女を詠んだ句で、謠の文句取りに過ぎない。

★今人の句では

わぎもこは今もすねると背を向け

采女社は人嫌ひして鍵をか

け

花は皆洞むものなり采女さまあきらめといふ手を知らぬ采女なり

健全漫畫雜誌

大阪フック

月刊

價 二〇錢
送 一錢
全國ノ書店
賣店ニアリ

發行所

輝文館

大阪市東區橫堀二
振替大阪二六四番



(室BA階六店貨百鐵大)會談座樂極獄地柳川と展眞寫疆蒙支北

16年9月

會談座樂極獄地 柳川

會洞朽不・催主

・路史・潮満・園松小・葉春・人某・香紫・風史・秋豆・造夢波・美鮎・期由自・史女乃護・師耶路は者席出
(部輯編) トーア・生凡及氏諸の呂多紅・王夜・介之玲・太柳・明恒・史與寄・彦籌・鹿石・笑一・子柳白

路郎「地獄」や「極樂」を詠んだ句に就いて座談會を開くことにしました。表現の巧拙を談されるのもし、川柳人の來世思想を句を透して觀るのも無意義ではなからうと思ひます。

一同「結構ですな。」

路郎「大體、地獄といふ名稱は支那で創られた譯語で、其原語は捺落迦(略して捺落)ですが、川柳に詠まれた地獄は殆んど佛教の地獄ですね。佛教の地獄と異教の地獄(キリスト教、回教、婆羅門教)とは甚だしく類似してゐます。では地獄と極樂の句を交互にやることにしませう。

神經を抜けば地獄のおもしろさ (孤篷)

某人「面白い句ですね、よくある地獄の繪を見ても、また見世物を見ても、極樂といふホンのおこしらへものなのと違つて、地獄のほうが遙かに場面が大きい、例へば針の山だとか、血の池とか、随分有るわけですが、それも生身の人間がさういふところへ行きひいては随分つらい目に遭ふ。地獄といふものを考へ出した人達は、さういふところを狙つてゐるのでせうが、其の肝腎の神經を抜いてしまへば随分退屈なものになつてし

まふ。山あり、池ありで、ハイキングや、水泳位ひ出來さうで(一同哄笑)極樂よりも、變化ある地獄の方が面白いと思ひますが。この句の作者も其處を狙つてゐると思ひますな。

史路「血の池や、針の山や、舌を抜かれたり、目を抉ぐられたりするのは、惡業に對する懲らしめですが、若し亡者の神經を抜くことが出來たら、その亡者どもが平氣な顔をしてゐるのを、あの怖い鬼が見てゐる百態の現象が面白いと思ひました。

小さい時分お婆さんからよく聞かされた昔話ですが、生前仲の良かった輕業師と山伏が、ある日一緒に死んだが二人共地獄へ落ち、あの世でも仲良く、針の山や、血の池では輕業師が山伏を擔ぎ、火の車では山伏が御祈禱をして火を冷いものにしてしまつた、といふ話の先入感があつたものですから此句でもそうとつたのです。

路郎「作者孤篷君は地獄、極樂について造詣が深いのです。が今日は生憎都合が悪くて出席されません。兎に角地獄とか極樂とかいふ來世思想を創造した作者の頭腦を考へると、實に怖ろしい想像力を持つた人達で、確かに詩人です

ね。

佛教の教典では正法念處經の地獄品と觀佛三昧經と阿含關係の經典に地獄のことが詳しく説かれてあるさうですが教典の地獄をのぞくだけでも大變です。次に極樂の句を提出しませう。

極樂へまだ彼の人が来てくれず (かほる)

豆秋「地獄の面白い變化と較べて極樂はやゝ單調で、この句から考へますと、退屈を感じますな(哄笑)。地獄は繪を見てゐても面白いが、極樂は佛壇を見ても想像出來るやうに、あんなところらしいから實に退屈なところだといふやうな氣がしますな。

あくびしてゐるのもあらう彌陀淨土

某人「地獄はそれどころではない。

自由期「同感ですな。蓮の上にいづ迄も、何十年でも、乗つてゐて、よく退屈せずにおられるンかいなあ」と(笑)

某人「いつそ死んでしまひたいね。(笑)

史路「しかし極樂はそんなに退屈な處ではありませぬよ。現世の千年が僅かに一ト時であつたり、半時であつたりす

るんですからね。

路郎 〓とに角いろく、な教典に表はされた極樂といふものは、十方淨土説、西方淨土説等々種々な説があるが、西方淨土説でも淨土三部教によつたものが、詳しく正確ださうである。極く大まかに説明しても、先づ其の國土は金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙の七寶を合成して地となし、光赫焜耀と照し輝いて醜陋汚穢のものは何一つ存在しないし、春夏秋冬の時候もないし、常に春のやうであつて、寒くも、暑くもないところだと説いてゐます。勿論音樂も奏でられてゐるが、退屈だとも言へるし、退屈でないとも言へさうです。

一笑 〓此の句は新婚そうくの奥さんが亡くなられたのですね此の句から思ひ出しましたが、西洋の人でシペリヤへ新婚旅行に出掛けたところ、ある日遭難して良人が氷の割目に落ちて死んでしまつた。悲しんだ妻はいつ迄も良人の死骸の浮び上るのを待つてゐたんです。そうするうちに歳月は経つて花嫁さんはいつの間にか老婆になつてしまつた。やがて何十年目かに良人と廻り合ふことが出来たが、自分とは老人であるのに良人は依然として、新婚當時の如く若かつたと言ふ。……こんな話を何かで

讀みましたが。かほるさんの句は反對に奥さんが先に亡くなられて、極樂で良人の来るのを待つてゐるんですな。これでも良人が長生きしてゐて極樂へ来た時は、もう老人になつてゐる、なんて變なぐあひでせうな。(笑)

石鹿 〓深刻な句であると思ひますな。私も昨年妻を亡くしましたからよく判ります。女は一體に善良で、死んでも極樂へ行けるでせうが、男は浮氣をするから極樂へは行かれませぬ(笑)。だからいくら妻が極樂で待つてゐても夫は地獄へ落ちてしまふから永久に會へんかもわかりません。私の妻なんかは佛教信者で正信偈を朝晩となへてゐたんですが、私なんか一週忌も忘れてゐるほうやから……(嗤笑)

某人 〓それでも、來ると思つて待つてゐる、そこが極樂的なところだらう。(笑)

夜王 〓私は此の句を心中者と解釋しました。一緒に自殺した處が、女が死んで男が生き残つて却々來てくれぬ。それを持つてゐるといふ、若い氣持に解釋しました。

小松園 〓心中も一つの罪惡でせう。夜王 〓一緒に死んだ時はどうなるんでせうな。

某人 〓女は地獄へ。男は極樂へ。(笑)

史路 〓先生。句を批評するのに、來世思想を信じてゐると地獄極樂を無視してゐる現代人の頭で解釋すると、一體どちらで解釋したらいいんですか。

路郎 〓それは作者の態度が句の上に出てゐますから、その態度で批評しないと、てんで問題にならないと思ひます。お次は矢張り孤蓬君の句です

踊り喰ひふと地獄繪を思ひ出す (孤蓬)

護乃 〓わたしの家の女の子がいつも食事をする時、その菜が魚である、骨のないところを選ぶのです。箸つてゐるうちに、背骨が見えて來ると何んだか人間といふものは淺間しいなあ、といふ感じがすると言ふのです。生身の動いてゐるのを口にした感じを出すのに地獄繪を持つて來られたところが孤蓬さんの手際であると思ひます。

豆秋 〓地獄繪といふものは、勸善懲惡をうまく表現してゐますね。嘘を吐くと舌を抜かれるし、量を胡魔化すと目を抜かれるし、實際うまく考へたものです。闇取引をした者はどんなところへ行くんでせう。

某人 〓眞暗闇なところへ入れられるんでせう。(笑)

護乃 〓暗黒地獄といふのがありますよ。

豆秋 〓罪によつていろく準備してあるんですか。(嗤笑) 路郎 〓そうだなア。どんな罪を犯してもちやんと當嵌るやうに出來てゐる。われく、地獄に對する概念は惠心僧都の往生要集から來てるらしいですね。この思想は最初の厭離穢土で地獄を叙し諸經論を引照して巧みにその情景を描いてゐます。世人が往生要集と云へば地獄の苦相の物語であると思つてゐるほど社會の人心に深い印象を残して居ります。今云はれた闇取引の人たちが行く地獄もちやんと用意してあるのはホト、感心して居ります。(爆笑)

豆秋 〓地獄の作者は偉いですなあ。(嗤笑)

路郎 〓それから死んでも地獄極樂のどちらへも行かずに途中にゐる人があります。白柳子 〓それが幽霊ですか。小松園 〓幽霊は地獄ですか。路郎 〓イヤ、幽霊はまた地獄のものではない。途中にゐるので

史路 〓それでは郵便屋さんが困りますね。(笑) 某人 〓局止めだな。(笑) 路郎 〓世間では死者の魂が宙に迷うといふ風なことを云つてゐるが、實際は中有と云つて有情の状態を四つに分け、一を中有、二を生有、三を本有、四を死有と云つて居ります。母の胎内に宿る一刹那が生有、命終の一刹那が死有、その中間が本有、この死有の一刹那から生有の一刹那へ移る間が中有である。この中有を中陰とも云ひます。人が死んで、七七日を祭るのはこの中有の間を祭るのです。だから、その日が完了するのを満中陰と云うのです。一同 〓はア、なるほど。石鹿 〓此の句は作者自身か、それとも他人の喰べてゐるのを見て詠んだんでせうか。路郎 〓作者自身でせう。自分で喰べてゐて、ふと何んだか淺間しさを感じたのです。石鹿 〓朝鮮の料理にこんなのがありますよ。大きな釜に角の生ゑた牛の首を入れて炊き出して食へます。これなんか本當に地獄繪ですね。路郎 〓では、次の句へ

極樂か地獄か素焼の壺に聞け (滿潮)

作者が出席されてゐますから意見があれば何んでも聽いて下さい。滿潮 〓いや……(頭をかか) 護乃 〓この句は骨壺ですか、

わたしは章魚壺にとつた（一同爆笑）章魚壺に入つてゐる章魚に、極樂か、地獄か聞けと言ふふうにとりました。

豆秋 〓 そりや面白い！ さうとつた方が面白い。（笑）

史路 〓 私には土器と感じた、考古學的ないゝ句だと思ひました。

史路 〓 今でも素焼の壺を使つてゐるところがありますか。

満潮 〓 京都の近郊ではまだ使つてゐますよ。

夜王 〓 田舎では今でも使つてゐます。

小松園 〓 この句、骨壺に入つてゐる佛自身が、極樂へ行つてゐるか、地獄へ行つてゐるか聞け、といふ意味ですか。

それとも自分達の行ひが、地獄へゆくやうなことはしてゐないが、極樂へ行くだらうか、地獄へ行くだらうか素焼に聞いて見よ。といふ意味か、どちらですか。

満潮 〓 私はお恥かしいことですが、無神論者です。それで地獄とか極樂とかいふことは素焼の壺に聞いて呉れといふ氣で作つたのです。

路郎 〓 もう意見はないのですな、では次へうつりませう。

赤鬼青鬼地獄の色も
ちと派手な (宏方)

はどうです。

史路 〓 面白いですな。地獄も大いに宣傳しとる。（哄笑）

某人 〓 この世では塗料の廻りが悪るいからね。（笑）

小松園 〓 一體、鬼は赤と青だけですか。

自由朗 〓 白や黄では全然凄味がありまへんなあー。（笑）

史路 〓 黄色はありますよ。

白柳子 〓 やつぱり、鬼は赤が感じが出ますな。

夜王 〓 赤・青だけとはどういふわけですか。矢張り感情を表はしてゐるのですか。

路郎 〓 さうですね。感情を表はしたのでせう。床屋の看板も赤青を使つてゐるやうに、あれはもと醫者の看板で、静脈と動脈を表はしたものです。

史路 〓 地獄の地名も割に詳しくですね。三途の川だとか、地獄の三丁目だとか。ね先生

路郎 〓 さあ、地獄の地圖は見たこともないが、こゝで一才地獄の種類について話すと、前にも云うた正法念處經は七

十卷もある大部の經典で、其五卷の終りから十五巻までが地獄の敘述で埋められてゐるといふことです。これは北魏

の瞿曇般若流支の譯出したもので、この經典では地獄を（一）活、（二）黒繩、（三）合、

（四）叫喚、（五）大叫喚、（六）焦熱、（七）大焦熱、（八）阿鼻

の八大地獄に分類し、その八地獄のそれぞれに別處といふのが十六づゝあるのです。

（一）尿泥、（二）刀輪、（三）釜熱、（四）多苦、（五）閻冥、（六）不喜、（七）極苦、（八）衆病、（九）兩鐵、（一〇）惡杖、（一一）

黒色鼠狼、（一二）異々廻轉、（一三）苦逼、（一四）鉢特摩鬚

となつて居ります。觀佛三昧經の地獄の名稱は正法念處經とは異なつて居ります。阿鼻

地獄だけ同じで、其の他は十八小地獄、十八寒地獄、十八黑闇地獄、十八小熱地獄、十八刀輪地獄、十八劔輪地獄、十八火車地獄、十八沸屎地獄、十八鑊湯地獄、十八灰河地獄、十八鐵窟地獄、十八鐵丸地獄、十八尖石地獄といふ風にみな十八の數になつて居ります。

史路 〓 一體、地獄極樂は上にあるのですか。

路郎 〓 極樂は前にも云うたやうに、十方淨土説や西方淨土説があります。極樂が天上界にあり、地獄が地底にあるとの説もあるし、その距離は私達の想像外にあるのです。

豆秋 〓 閻魔はんはどういふ人ですか。

路郎 〓 閻魔は初め審判官ではなくて、矢張り人間の如く憤んで

ゐたらしい。

豆秋 〓 剃き婆といふのがありませぬ。地獄へ行く途中で着物を剥ぐ、地獄の追剥だなア。（一同爆笑）

夜王 〓 大法論に載つてゐたのに剃婆が亡者に酒を吞ましてその酔はつてゐる間に頭の味噌を抜いてるところがあります。（笑）

護乃 〓 大法論といふのは宗教雜誌ですか。

夜王 〓 え、そうです。この他に印度のなんとか言ふ樹で見ると、ものが透明に見へる。つまりレントゲンのやうなものですな。（笑）

路郎 〓 閻魔の廳には、淨玻璃と言ふのがあつて、亡者の生前のことが全部うつる仕掛けになつてゐるさうだ。

護乃 〓 テレヴィジョンみたいなのですか。（哄笑）

路郎 〓 句について特に批評する點はないかね。

自由朗 〓 これは別ですが、地獄に居つて其處で改心したら極樂へやつて貰へるもんでせうか。（笑）

路郎 〓 それは駄目だ。しかし生れ替へることは出来る。それも人間に生れられたらいいが牛馬に生れるかも知れないよ。

豆秋 〓 地獄でいくら責められても死なんのですか。責められて此の世に生き返へるとか

……。（笑）

路郎 〓 物凄ゝ責め道具があつて、さいなまれるんだが、いくら責められても生命だけはなくならない。そして次から次へと責苦に廻されるわけだ

柳太 〓 次から次へと廻されてまたもとの處へ戻つてくるのですか。

路郎 〓 別府へ行くのとわけが違ふよ（一同爆笑）そりや實に物凄ゝ目にはあはされるんだからね。それに大變な永い時間だからな。

満潮 〓 地蔵さんのとこへは一體どうした者が行くのんでつか。

豆秋 〓 地蔵さんは小供を助けるものでせう。

某人 〓 地蔵さんは小兒科ですよ。

路郎 〓 邪法を信じた母が死んで無間地獄に墮ちたことを知つた親孝行で閉法の志の深い娘が家財を賣つて大供養をした。それを佛が喜みされてこの娘が地蔵菩薩になられたのださうです。

夜王 〓 私のね、近所の洞に地藏様が祀つてあつて、いつも私の子供が其處で遊んでゐたが、子供が死んでから其處を通る度に賽銭を入れますが、これは地藏さんにあげるのはなくて子供に小使錢をやるやうな氣で入れるのです。（笑）

路郎「賽の河原」は孤地獄の一つです。孤地獄といふのは八熱地獄や八寒地獄の外にある特殊地獄を云うので、産後の病氣で死ぬ婦人の血の池地獄、子を生まぬ婦人の苦しめられる石女地獄などもさうです。

さいの河原は西院の河原だといふ説があります。淳和天皇の隠棲地であり、京都の西院であるから西院と名づけた地名であるが、この西院通の加茂川と桂川の合流する地点を佐比の河原といひ、貞觀十三年にこの地を百姓の葬送地に定めたといふことであるが、後、七條の方へ移轉させられたけれど、十五歳以下の童男童女は矢張りこゝへ葬つたので小兒が死ねば「西院の河原」へ行くといふ傳説を生んだのだといふし、又小石の澤山ある荒地の事をさいの河原ともいふし、我が國ではさいの河原に賽神が居られるところから、混同して賽の河原が出来たものらしいが、教典の中には賽の河原はないさうである

某人「先生の言はれたやうな古い本とか、お經の本には、極樂よりか地獄の方が微に入り、細に亘つて書いてあるといふことは、人間が非常に地獄的だといふことになりませぬ。逆に考へ

るとさう言ふふうには、反省してゐるといふことは、人間の性善を語つてゐるといふやうにも考へられる。

柳太「現世と來世との善惡についての定義が判りませんが。」

某人「それは閻魔が判断して罪のないものは追返へすんだ路郎「さう、すべて閻魔が審判して決定するのだ。」

豆秋「裁判官があるから、辯護士もあつていゝ筈だが。」

(笑)

路郎「淨玻璃があるので辯護士は要らぬわけだ。」

さて先程から提出した句はす

べて最近の血の流れてゐる川柳ばかりですが、古い時代のものは句振りがすつかり違つて居ります。明治時代では小島六厘坊が異境百句の中に、地獄、極樂を詠んで居ります。感覺派のやうな鋭敏さはありませんが滑稽味が横溢してあります。時代を考へて味はつて下さい。

針の山かはの草鞋をはいてゆきひまな時禪の蛋とつてゐる

仇つばい後家は閻魔を目で殺し淨玻璃の鏡を見ては閻魔機き

大王は女と見ればぐにやりとし針の山恐れぬものは輕業師

肥へたのを鬼は夜食で喰ひ残し三途の川うかとはまつて生き返へり

極樂行三途の川で乗替し極樂で閻魔の事を髯といひ新亡者蓮のうてなをあぶながら

蓮華樓遊びなんしと青いやつ蓮華樓沙婆で馴染んだ奴を買ひ

六厘坊は明治四十二年に廿二歳で亡くなつたが小説や其の他いろいろの作品を残してあります。想像力が豊富だつた。

極樂より、地獄の句の方が面白いと思ひます。

古川柳については鮎美君が「武玉川」柳樽「柳樽拾遺」な

どを調べて呉れましたが極く僅少です。

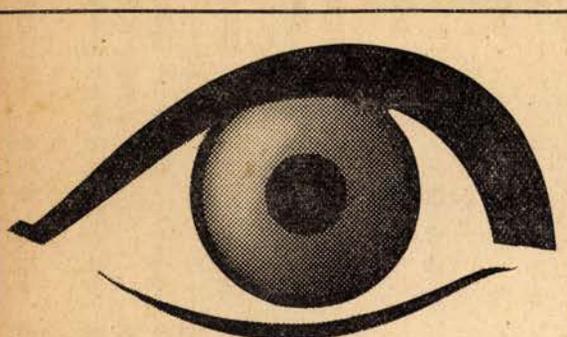
極樂と地獄のあひが五十軒極樂は江戸を去ること遠からず何れも吉原を詠んだものです

淨玻璃へてつきりうつるやり手婆々

血の池へ赤鬼ばかり責めにやり古川柳は大體に瞬味模糊としてゐる。それらと比較すると

地獄極樂の句も最近進んでゐるわけです。古川柳や明治時代のものを足蹴にしてゐる。

この意氣で今後も大いに精進して頂きたい。ではこれ位にして置ませう。(凡生筆記)



頑張りがロートで續く夜業の眼
ロート一滴事務に疲れた眼に涼し

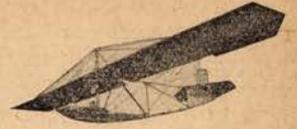
適應症
結膜炎・角膜炎・疲勞眼・トラホーム
學校眼炎・眼險縁炎・結膜充血
角膜翳・麥粒腫…等

藥價

- ◇小瓶 二十錢
- ◇大瓶 三十錢
- ◇徳用 五十錢
- ◇小兒用 二十錢

▲全國到る處の藥店にあり

山田安民藥房 本舖



談

愚

朗由自畑小

どくだみ

増産奨励のため、縣廳の方から、大學出であると云ふ偉い技師のお役人様がお見えになりました。村民一同を學校に集められて、さつまいも栽培法について累々御講話の折しも、つと窓外の柿の樹の根元を指差されて、「されば諸君、諸君はかゝる所に芋を栽培して能事足れりと成せるが如きは」と、大變御立腹に成りました。

程度

多年、慘たる苦心は報ひられて、全々種の無い西瓜の栽

柳川 世界史 (VII)

戸田 孤 篷



(六) 秦 史 始皇帝

麻の如く亂れた天下を統一したのは我國の織田信長にも比すべき功績。然るに法家の説を過重して焚書やヒツトラでも二の足を踏む様な學者の生理めをやつたりして自惚の強い始皇帝の信用は壽命が短かゝつた。萬里の長城を築し阿房宮を建て、馬鹿の別名を製造した。

嚴法を一つふやしてほっとする
良心に觸れる意見は蹴散らされ

長城の櫓いくつか雲に入り
阿房宮先づ後宮の間取する

項羽と劉邦

劍は一人の敵、書は姓名を記すれば足ると勝手な理屈をつけて好きな兵法に専念し將に將となつた項羽と、股くゞりの韓信や張良、樊噲等名臣に取巻かれた長者劉邦とが秦を見棄てかゝつてゐる民衆の前に仲よく現はれる。一方の旗色が少しよくなると共同作戦をあつさりかなぐり棄て、いがみ合ひをはじめ、向ふ意氣の強い項羽は劉邦を項門の會に於て打ち取らうとす

(七) 漢 史 前漢の高祖

劉邦が位に即いたのが漢の高祖。周の封建制と秦の郡縣制を併用して漢室二百年の基をきづく。こんな偉い高祖でも牝鶏にはかなはないと見え頼朝の政子に於けるが如く賢臣忠臣をしりぞける。

張 騫

萬里の長城が無用でなかつた程北方匈奴の恐威はさしせまつてゐた。西域と聯合軍を形成せんとして使者張騫が砂漠の冒險旅行に出發する。一寸つかまつても幽囚十年。折角目的地に着いたが相手にかぶりを振られて又引き返し無事長安に歸り西域宣傳の役を引受ける。高祖はその他南越(今の廣東地方)を略し、朝鮮

る。そこをぬるく逃げておくと民心を修めた劉邦は天下で王手とくる。虞や虞や若を如何する事も出来ず項羽夫妻は同じ双の下に伏さねばならなかつた。

跪坐させた方が亡びる方でした

さあ今ですよと焚燬習て云

ひ 虞美人草楚歌をうたへばや

しまれ

を服す。

張騫は今夜も星を見てあま

す 出迎へもなく長安が見えは

じめ お土産に西域日記あるばかり

赤宇補填さあ專賣だ贖罪だ

王 昭 君

謡曲の素材にまでなつた漢代のローマンス。後宮の三千の畫像の中から醜女第一と云ふのを匈奴の人身御供にさげける漢の對外政策。インチキ畫工に賄賂を贈らなかつたばかりに美女第一がその撰に當る。論言汗の如して惜しくも掌中の玉をとられた元帝。畫工をしげり首にした所ではじまらない。一子が匈奴の王との間に産れたものゝ長安を戀ひ死にして包頭の域外に青塚を残す。

練絹の當て美女にも段がつき

王昭君お顔に自信持ちすぎ

王昭君まだ時々はベツとは

單干に一指も琵琶にふれさせず

王 莽

國勢のおとろへた漢は外戚王莽に篡奪される。瑞祥と勝手にきめて即位する

増に成功した。だが其の翌年からは、栽培仕様にも種子がなく、研究が一に戻つて、多年の苦心が水の泡に成つてしまつた。

愛は盲目

子供が轉んで泣いて居た。通りかゝつた男が自轉車からとび下りて抱き起してやつた。家の内からとび出して來た子供の母親は、男の顔と自轉車を七分三分に睨みながら、「怪俄しやへなんだか」と子供に訊ねた。

演説

時間の切迫に、夫婦喧嘩を仕残して、あわてゝ會場に駆つけた彼は、其足で壇上に現れて、「諸君！」と、嚴肅な顔をして、満場の聴衆を見渡した、と、一人だけ、にやり／＼と皮肉な微笑を浮べた女性の在るを認めたのである。

「おや」と思つてつらく／＼と睨み見るに、これ如何に、何時の間に來居つたのか、にくさにもにくい仇敵！ つまり妻の顔ではないか、彼は不思議上を破れんばかりにぶつ叩いて叫んだ「馬鹿ツ！」

後漢興起と班超

三日天下の光秀の運命に似て王莽は漢の王族劉秀にとつてかはられる。と間もなく張騫第二世の役をつとめる班超が西域へ。彼は任地で始めは歓迎されたが、匈奴の使者が來ると掌を返した様に待遇が變つたので班超はしやくにさはつて匈奴の使ひを刺殺してしまふ。班超の歸國するまで西域は後漢のものだつた。政略する歡待のつきるとこノスタルジヤ班超白髮又寫し

東西交通

班超の部將甘英はローマに行こうとしたが、商敵ペルシヤ人にはゞまれる。ギリシヤ、ローマの文化はそれにもかゝらず西域を介して流通し、絹を求めるローマ船が南支に到着したのもこの時代。法隆寺に残るギリシヤ流のエンタシスの柱のはしりがすでに隣國支那まで來てゐた事が考へられる。

蠶史にふれるローマの經濟史

後漢の滅亡
秦の時代からすでに宦官と

云ふものが後宮の取締りに君側に侍つてゐたがいつの時代に於ても微官にかゝはらずその地位を利用して勢力を張つてゐた。後漢も此宦官と外戚のために亡される。黨錮の獄で正義派がいためつけられると、こんどは宦官狩となり、妖術をつかふ黃巾賊があらはれたり、遂に天下がみだれて曹操と孫權が有名な赤壁の戦をする。降服使をのせたはずの孫權の柴船をだまし船と氣づかぬ曹操の江上艦隊は猛火の内に殲滅され、曹操の子が魏の國を起して後漢亡ぶ。皇帝の弱身宦官知つてゐる柴船は先づ風上をたしかめる

漢の文化

秦の焚書で一端地におちた儒教は漢代になり復興して、史學は司馬溫公の史記、班固の漢書となつて後世にのこる篆隸から楷行草と書道も進歩し紙の發明も完成する。長安の都には西域人のエキゾテイックな顔もちらつく。

動問に仲舒は學と復奏しその壁のなかにも一冊あつた筈
救はれた子供も史記をほめ

にくる
達筆の草書でかゝれよう讀ます
(續く)

化膿症

齒槽膿瘍
齒齦炎
中耳炎
蓄膿症
扁桃腺炎
丹毒・濕疹
トラホーム

内服により化膿菌を殺滅し、根元的に短期に治癒を促進する。
甘錠 五十錠 百錠

アールバシール錠

A 289

元寶發造製
阪大 會商品藥内之山 京東



義士口上書の疑問

古川 風竹

赤穂義士一黨が、討入の際吉良邸の表支關に留め置いた口上書は、事變の發生、復讐の動機、かれらの心境等を卒直簡潔に聲明した文書にて、忠臣蔵史料の最も貴重なるもの一つである。浪士らが、よく其の身分を辨へ、敬虔なる態度を以て、所信を述べたる文辭の中に、毅然として冒すべからざる武士精神の躍如たるが看られる。

私は、つい先頃、郷里山口縣の柳友南岳坊から、義士口上書の複寫を貰つた。これは赤穂花岳寺の藏版で明治三十二年の翻刻出版である。長さ四尺に餘る巻紙へ墨色もよく石版印刷してある。「口上」の文言は力ある草書(原物右衛門の筆と云はれる)で二十行に認められ、元禄十五年極月十四日と日附し、大石を筆頭に寺坂まで四十七人が連署し、最後に「右四十七人にて御座候以上」と結んである。發行後四十年も経つたので紙もやや古色を帯びてゐる。

書第二三三頁に記載した口上書と、花岳寺版とを對照し、兩者の間に十六ヶ所も字句に相違があることを發見した。唯一無二であると信じてゐた口上書が、たとへ幾分でも差異があることは、私に取り大なる驚きであり不可解の疑問である。これを解決するに足る鍵はハワイには有りさうもない。「川柳雜誌」の誌上に拜借する所以である。

常識から云へば、花岳寺版が正文であると斷定したい。元來この口上書は正副二通作られ、正本は文箱に納めて吉良邸に残された。副本は十二月十五日朝、泉岳寺へ引揚げの途中、吉田忠左衛門、富森助右衛門兩名が、一黨を代表して、大目付仙石伯耆守役宅へ自首したとき「控」として差出してゐる。二通とも慎重に筆を執り、一字一句の相違もなきやう校照した筈である。花岳寺の寶物である口上書は、この正副二通の何れかであらねばならぬ。だから正文と言ひ得る。

福島氏に従へば、口上書は別に數通用意せられ、義士中の「頭だつた連中六、七名が一通づゝ懐中した」とある。しかし、これらは、ほんの手控の類であつて、正本と多少字句の相違は有り得ると思ふ。

福島四郎氏は播州加東郡小野町の産、夙に義士研究に没頭し其の蘊蓄を氏が主宰する婦女新聞(東京)に永く連載した。それを大修補し。世に問ふたのが昭和十四年出版の「正史忠臣蔵」である。さすがに福島氏苦心の結晶、「正史」を冠して耻しからぬ好著である。

かうした福島氏が、花岳寺所藏の口上書を知らぬ筈もあるまい。それを閱覽検討せぬはずもないわけである。しかも福島氏は花岳寺版と、小異ある口上書を其の著書に載せてゐる。それには何か大に據るところがあらねばならぬ。氏が花岳寺版と相違する理由を其の著述に觸れてゐたら私の一文は不要なのであつた。

こゝに、花岳寺版と福島版(正史忠臣蔵を假に斯く呼ぶ)との口上書を比較して見やう。左は花岳寺版のそれで傍點・を附したるは、福島版になき文字、括弧内は福島版にあつて花岳寺版に見えざる



同舟近詠

松山 前田 五健

默々と歸還の兵は貝の如し
軍艦の大きき島とくらべ見る
灯る島灯らぬ島も景の中
ラジオドラマ例の如くに鶏を呼び

兵庫縣御影町 長崎 柳秀

書籍部に父子は別な趣味の棚
土地持つて都市計劃へ腹を立て
長煙管ようお考へやすと立ち

仁川 池田 可宵

防空ももう演習で済ますなり
日曜の調子にがばと起きよかし
父親はまだ歳頃と氣がつかず

今治 長野 文庫

未だ話ありみつ豆を註文す
別荘に居るが羨まれぬ躰
轉業をするが是か非か四十過ぎ
實行は兎に角上意下達せり

神戸 潮田 明坊

落ぶれて居れど語れば一家言
掌に根を載せ散歩戻つて來
臺所へ廻つて端た金を借り
家の内に髪を香動く内祝

長男歸省 歸省した嬉しさ行李どんと置く
山岳部頭髮亂し戻つて來

文字又は花岳寺版と異なる文字を使用せるを示す。

浅野内匠頭家来口上。
・去年三月内匠頭儀傳奏御屋敷御馳走之儀に付吉良上野介殿含意趣(罷在候處御殿中に於て當座)難通儀御座候爲(有之候か)及又傷候、不辨時節場所を働不調法至極に付被切腹仰付領地赤穂城被召上候儀家来共(まで)畏入奉存、請上使御下知城池指上(差上)家来共(家中)早速離散仕候、右喧嘩之節御同席御押留(御押留)の方(御方)有之上野介殿討留不申内匠頭末期残念之心底家来共難忍仕合に御座候、對高家之御歴々家来共して、挿擧憤候段憚に奉存候得共、君父之體俱(共)不我天之儀難點止今日上野介(殿)御宅之推參仕候、偏繼亡主之意趣志迄に御座候、私共死後(若し)御見分之御方御座候は、御披見奉願

如此御座候以上

なほ、福島版は原文の複寫でなく、活字である。右口上の次に「浅野内匠頭家来」と再記し、大石内藏助以下四十七人連名(連署ではない)とあり、日付は「元禄十五年十二月」とあるのみ。これらも花岳寺版とは違つてゐる。

私は、内心、花岳寺版を正文として採りたいのであるが花岳寺版で一つの瑕と思はれるのは、四十七人連判の中で大石が「大石内藏介」とサインし、小野寺十内が重内、間十次郎が、重次郎と署名してゐることだ。何かの文獻で大石は折々「内藏介」と書いたといふ事を見たやうに記憶するが後世へ残す重要な口上書に、「介」と書くことは腑に落ちぬ小野寺も間も同断である。

口上書の日附は極月十四日とあるが、十一月末には既に用意でき討入の日が確定したとき之を記入するまでに調つてゐた、と私は想像する。討入日は初め十二月五日と内定し、九日に延び更に十四日となつたのである。

署名の順序も、大石、吉田、原片岡の元老連は筆初めであるが他は順序不同である。それは作戦本部たりし堀部彌兵衛宅へ立寄つたとき、同志に、それ〴〵署名させたからであらう。口上書に就いて私の言ひたいことは盡きた。義士研究の先達から、私の疑問に光明を投げて下さらば幸甚である。因に、花岳寺版の發行日は明治三十二年五月十五日、發行者は兵庫縣赤穂町花岳寺住職釋種仙桂、翻刻兼印刷者は京都市六角通富小路東入大黒町十四番戸、藤田又治郎と紙巻の末端に細記してある。

長野縣須坂町 高峰 柳兒

奈良縣田原町 嶋田 翠峯

兵庫縣 昆布

松江 勝谷 山川 兒

弱い

お隣りへ

病室へ

水をのむ

またもとの

冷蔵庫

女事務

死ねば

小遣の

夏服に

晴れた

戦線の將士へ
白衣の勇士へ

慰問品

袋問慰

慰問品賣場一階



店貨百向用實
屋坂松
橋本日・阪大

五年振り繼母を訪ふ

名古屋 鈴木 可香

豪雨禍

山口縣 三原 狂路



多紅路津・(同)栗風中田・(同)客水本正・(同)香業川風・(員會詞巧不)花潮尾丸☆
☆右は眞露)。たれさを行吟津室々旁問訪を君史染村木友柳は君諸の笑花・(同)呂
(君諸の業風・香業・客水・花潮・笑花・呂多紅)

川協の★

★有恒川柳講座は午後五時開室、席題作句(五時―六時半)、作句に關する講義(六時半―七時半)、應句披露(七時半―八時)、質問、應答、雑話(八時―九時)、講師は麻生路郎先生、同講座では時局柄有恒俱樂部會員に川柳哲學による日本精神の涵養を推奨してゐる。
★松島肇氏が八月十五日の徳島日に赤穂事件を、川柳に現はれし

★關東地方を襲ふた七月中旬の猛颯風は其の中心部が、横濱口から針路を變へた爲、被害は割に僅少で、村田周魚、梅本慶山、森井荷十、山田宙望、風間光樹、阪井久良俊、阿部佐保蘭、井上萬壽藏、八十島杜若、三浦太郎丸、河柳雨吉、西島〇丸、掛飛吉宣、早川右近、福田山雨樓、大谷五花村天羽鶴路諸氏は皆被害なく、御無事何よりでした。坐間笑寺鬼氏(神奈川県懸逗子)の便りでは二、三町離れた所などは疊の上に迄浸水したし、裏山が崩れたりしたが幸ひ同氏宅は御無事であつたとのこと。

種々相といふ題目で取扱はれてゐるが、川柳は嘲笑したり愚弄したりするものやうに解されてゐるが、これは一人の教育家が腐つたために教育家全部が腐つてゐるやうに解するのが不當であるやうに、川柳は決して嘲笑や冷笑を目的としてゐないので、もつと川柳に對する認識を深めて欲しい
★阪神電鐵の「産業報國會文化部川柳會」は九月五日午後六時、西宮産報會館で開催される。「割箸」十句結美選、「國債」五句互選
★阿部佐保蘭氏は八月初旬頃より静岡縣駿東郡にあるさやり地蔵の庫裡で悠々自適され、下旬に歸京の由。
★安井寛氏(徐州)の便りによると、同地在住の全文藝人を網羅した「文化奉公會」が此の度結成され、主として現地報告に活躍することになつたと。



募集句 一路集

狸 五健選

豆狸花にうかれて道迷ひ
狸常會酒の配給でちつともめ
煙には矢張り負けた豆狸
腹つゝみ開きたい様な月が照り
拓土村狐狸の出た話
酒不足の理由を狸も知つて居る
腹つゝみ狸の脊に月があり
徳利を持つて狸は愛嬌者
水酒に狸知れたかなと思ひ
ビール呑む人と狸の腹が似る
檻で見るこんな狸がだますのか
マネキンの狸徳利を掲げて立ち
養狸業皮算用が圖に當り
狸フト俺も一肌脱ごかしら
傳説を残す狸の暗い穴
良い月夜狸は化ける事忘れ
狸には勝つて兎は龜に負け
常會の餘興は狸腹つゝみ
パーマネントを檻の狸は不審者
ユモリストです狸の顔を御覽
子狸が狸のまゝで捕へられ
床の間の狸主人にソツクリだ
落雷に狸危く化けそこね
鐵格子狸だませぬ顔である

正直な人をだまして居る狸
狸でも出て來そうな程よく煙り
狸もうあきまへんと檻にある
生捕つた狸の皮は獻納だ
狸が持つ徳利も化けさうな
お土産は狸にも子があるのなり
ヨイコードモ狸の話承知せず
兒童劇お腹を叩くのが狸
老僧と狸なかよく好い月夜
むかしは狸も化けて懲惡
(佳)酒買の狸のしつぽ雨に濡れ
(佳)狸も仁義があつた化くらべ
(佳)狸もう住んでは居る新開地
(佳)映畫では太鼓の音で狸化け
(佳)和尚フト狸を描いて糞をま
(佳)へそまでは手の届かぬ親狸
(佳)老練な狸宵から化けて出る
(佳)景氣よい狸百圓札に化け
(佳)十五夜を狸常會日ときめる
(佳)山火事へ衛間に合はぬ大狸
(佳)子狸は闇夜と云ふが知る知り
(佳)山鹿流など、狸の叩き振り
(佳)檻の狸へ秋風の吹く郷愁
(佳)狸とても御恩は知つてゐる
(佳)狸の子まだ人間を知らぬ者
(秀)狸曰くこのごろ破れ笠もなし
(秀)眉に唾つけて月蝕見る狸
(軸)狸々汝元來靈か實か

同 是
同 よしみ
同 小樓
同 琴聲
同 葉光
同 不味公
小 樓
同 ライト
牛 歩
千 斗
年 尾
武 士
抱 逸
路 村
蝶 人
末 夫
進 路
史 路
同 路
美 奈 子
み づ ぼ
半 休
同 休
代 志 久
芥 舟
一 龜

同 是
同 よしみ
同 小樓
同 琴聲
同 葉光
同 不味公
小 樓
同 ライト
牛 歩
千 斗
年 尾
武 士
抱 逸
路 村
蝶 人
末 夫
進 路
史 路
同 路
美 奈 子
み づ ぼ
半 休
同 休
代 志 久
芥 舟
一 龜

小包 水車選

不 朽 洞 會 記

冷 房 室 句 練

★窪田銀波樓氏(金澤)は近く東都に居を移される由。氏が四十二年間の金澤在住中、北陸の柳界につくされた功績は人のよく知るところである。金澤柳界のためにも氏の難金を惜しまむ。

★橋本美奈子さん(大阪)は島へ出て眞ッ黒になつてゐられるさうだ

新會員を募る

▼新體制下の常識として川柳を知らたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼従来作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋(日本橋筋三)の七階にある松坂俱樂部の麻生路郎川柳講座へ入會さ

松坂俱樂部 川柳講座

松坂屋 川柳講座

三日曜日午後一時から開講。(作句・添削批評講義等)會費一ヶ月金壹圓。入會希望者は七階の俱樂部受付へ申込まれたい。

(川柳講座幹事)

會場風景

不朽洞會といふよりも、川柳の不朽洞と云つた方がふさはしい麻生路郎師と其の門下の和やかな集りが八月十日の午後二時半から、大鐵百貨店六階のA B室で開かれた。冷房装置で夏を忘れた涼しい會場が、まづ會員をよくこぼせる。定期前から浪玲之介氏、岡田某人氏を筆頭に續々と參集され、最古參の橋本練雨氏

北支藥強寫眞展

會場のA B室の壁間には最近飾朝された會員岩崎路郎氏の藝術味豊かな北支藥強の風物寫眞約三十點がズラリと飾られ、會員諸氏の觀賞にまかせてある。アチコチから激賞の聲が發散される。

地獄極樂座談會

午後二時半、地獄極樂の句に關する座談會が開催された。路郎師

小包の結び感謝にほどかれる
満員の電車小包邪魔になり
小包へ子供のやうに嬉しがり
つまらない小包ながら母の手の
小包を解けばころりと故郷の柿
冬物が夏に届いた軍事便
商用の小包子供知つて居り
小包の中味問はれたあわてやう
待ち切れぬ小包の紐無駄に切り
突然の小包ちよつとふつて見る
小包は妻の故郷に生つたもの
小包の紐のいろいろ母おもふ
兄からの小包母のものばかり
小包の嵩で洗濯物と知れ

一 龜 小包を開き真心にふれ ユリエ
秋 星 小包を一つ作つた疲れやう 八九満
半 休 入隊をして小包にする衣服 ライト
鷄 城 小包のそれから妻の故郷自慢 双 虎
みづほ 小包を開け母の事父の事 小 樓
美奈子 へそくりで母小包をこしらへる 同
詩 朗 書留で来る小包の小さ過ぎ 葉 光
武 士 (佳)山里の小包一つ 配達夫 彌 生
年 尾 (佳)小包を解けば懐し郷土版 千 斗
千 斗 (佳)討伐も終り小包渡される 靜 江
駒志希 (佳)小包にこまごま母の有難さ 葉 光
眞理子 (軸)家中の智慧で作つた慰問品 水 車
同 (軸)宛名まで二三度使ふ小包紙 同

を中心にして、不朽洞會の古老、中堅、新鋭がズラリと居並らぶ。珍間、珍答、珍談が亂れ飛び、中でも豆秋、史路兩氏のユーモアたつぶりの縦横無盡の怪舌?は物凄く馴れぬ筆記係を、しどろもどろに苦しめてゐる。地獄の凄慘を説く路郎師、極樂の退屈を叫ぶ某人、豆秋氏等、これに反撃して退屈否定説を稱へる史路氏、次いでX氏Y氏Z氏と交々語る地獄、極樂の繪巻はなか／＼に盡きないが豫定時刻の五時を過ぎる三十分にして漸く打切つた。(休憩)

總 會

午後六時から、いよ／＼總會プログラムの本題に入る。當日の司會者、水谷鮎美氏によつて先づ皇

居遙拜、護國の英靈に感謝の默禱が、滿場異議なく拍手を以つて祝福する。引續いて作句にうつる。終つて不朽洞會委員長戸倉普天氏の挨拶(同氏急病のため、須崎豆秋氏が代つて、普天氏の挨拶が讀まれる)續いて路郎師の挨拶があり、終つて夕餐、次いで協議に入る。先づ不朽洞會新陣容の強化をはかるため新委員の選舉にうつつたが、これは路郎師の指名に一任することに一決したので、師は奥村丹路、戸田孤蓬、水谷鮎美、橋本波夢造、須崎豆秋、正本水客、黒川紫香、北川春集、清水白柳子、鈴木石鹿、浪玲之介、河野夜王

が、滿場異議なく拍手を以つて祝福する。引續いて作句にうつる。兼題「學歴」路郎師選であるが、是れには特賞として抽籤で十名に路郎師筆の短冊と、客員柴谷幸二郎畫伯筆の色紙がある。これは好運の人に、その入選句を路郎師が揮毫されることになつてゐるので、我こそ金的を射らんものと滿場活氣がたゞよふ。抽籤の結果、短冊は玲之介、鮎美、柳木、夜王、波夢造諸氏に、色紙は紫香、白柳子某人、寄典史、滿潮の諸氏に當選。續いて會員各自の短冊交換があり、同九時盛會裡に楽しい一日の幕は閉ぢた。(凡生)

いのちある句を創れ

各地柳壇

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社八月例会

八月二日 於 御津八幡宮

出席者(順不同)

路郎・石鹿・紫香・鷹丸・一鉢・晴美
・玲之介・帆船・麥秋・緑風・鮎美・
正路・平井・九一・健作・かほる・寄
典史・指洋・翠光・六龍子・彌生・水
客・文雄・千斗・夜生・久人・恒明・
一笑・卜居・アト・白柳子・凡生・
霞乃。

席題「横着」 互選

気がかぬそれが横着とも見られ 玲之介
横着な彼は埃を氣にもせず アト
横着を隣組でも認められ 水客
横着などこまであんに似てゐるまき 翠光
横着を末の見込みがあるとほめ 石鹿
横着な猫ふりむいてニヤンと鳴き 千斗
横着は立つてる人を使うとき 紫香
淡かんでゐる横着の眼がきつし 鮎美
席題「人・影」 鮎美選

人影を淋しく見てる旅の窓
とうとしや地の底底の人の影
人影の暁ともなれば陽に溶ける
ト 居
翠光
人影を淋しく見てる旅の窓
とうとしや地の底底の人の影
人影の暁ともなれば陽に溶ける
ト 居
翠光
ト ラツクのはこり二人をわけさせる
割引の電車に作日の砂ぼこり
ハイキングみんなうれいし砂ぼこり
砂ぼこりバス満員の札で過ぎ
砂ぼこりだん／＼町が近くなり
砂ぼこりやがて戦車が見え始め
砂ぼこり名譽の家でバス停る
砂ぼこりの中でラムネが賣切れる
砂ぼこりこれから歩く道となり
砂ぼこりこゝは胡瓜の花ざかり
井戸水を養めて拭き取る砂ぼこり
砂ぼこり子供の下駄が裏返り
親と子が疲れて戻る砂ぼこり
ト 居
翠光
公園を歸營の兵士斜にぬけ
派手すぎる浴衣公園ぬけてくる
公園を通りあの日をふと思ひ
公園に若さうれしき人だから
公園でにわかに来たよい話
鍛錬の日課公園まで走り
ト 居
翠光
指洋
一鉢
文雄
麥秋
彌生
指洋
鷹丸
鮎美
寄典史
水客
一鉢
文雄
麥秋
彌生
指洋
鷹丸
鮎美

席題「砂ぼこり」 紫香選

公園で待つて、歸る共稼ぎ
公園に来てもつまらぬ獨り者
ものほしそうな顔して公園を歩き
公園の近くに住んで出すきらひ
ト 居
翠光
公園で待つて、歸る共稼ぎ
公園に来てもつまらぬ獨り者
ものほしそうな顔して公園を歩き
公園の近くに住んで出すきらひ
ト 居
翠光

兼題「手紙」 夜王選

手紙讀む女の肩が迫つて來
故郷の手紙西瓜を喰ひに來い
泣かされた手紙はそつとかくすなり
氣の弱い男手紙に書いてくる
文管へ入れぬ手紙もある少女
結局は手紙をやめて云ひに行く
便箋に書き巻紙に書き二十六
ひらかなの手紙が痛いとこにふれ
軍便皆簡單であつてよし
親展の來た日の女中皿を缺ぎ
不合格だつたを詫びて來た手紙
小休止母の手紙に勵まされ
好きですと書けど手紙長くなり
手紙でもやつぱりくどい男なり
手紙出すだけの孝行つゞけ居り
候文夫の手紙他人めき
手紙ちと時候の違ふまゝ屈き
寄せ書の手紙に父の字が目立ち
僕だけが讀める手紙だ母は無事
置手紙死ぬ氣でないにほつとする
ト 居
翠光
夜王
路郎選
朝の水せきたてるよな蟬の聲
蟬曰く小便かけて逃げて來た
リニツクサツク蟬のけがを拾うて去に
蟬鳴いて朝から暑い寺屋敷
蟬取りに行くよとカバン投出され
この寺にせはしさのある蟬の聲
故郷近く蟬鳴く中をパスが抜け
蟬追ふて遺兒健やかに／＼
ト 居
翠光
恒明
夜王
同
一笑
一鉢
文雄
麥秋
彌生
指洋
鷹丸
鮎美
寄典史
水客
一鉢
文雄
麥秋
彌生
指洋
鷹丸
鮎美

川今治支部句會(今治)
八月十三日 文庫報
トネルで煙暫らく途迷ひし 文庫
骨董屋新作書畫を煙らせる 丹兵衛
窓を出る煙でさへも争うて 紫陽
傳馬船一つ流れて獵奇めく 宵明
休閑地利用女中の智慧を借り 心府
休閑地今年は食へる物を植ゑ 鬼外
常會が一役買った休閑地 金竹
家の裏も空いて居ますと鎌を入れ 珠草
子が遊ぶ爲に置いとく休閑地 地下水
關門開通祝賀句會(下關)
七月十八日於下關鐵道クラブ 牛休報
簿記帳のインキ散らした夏蜜柑 秋無草
夏みかんころり午睡の子とならび 九天
夏みかん下女にむかせる爪があり 不二翁
夏みかん遠足の荷へ丸く出來 一旦
夏みかんリニツクサツクにこぶが出来 薫風
熱の子を笑顔にさせる夏みかん 黙笑
爪先の傷へ氣が付く夏みかん 不川
ラムネ飲んで後半道の茶屋を出る 同

松坂俱樂部句會(大阪)

六月十五日

白面人報

通譯に隣の息子呼んで来る 恒
 通譯も居て大陸の隣組 同
 お前来て通譯せよと部隊長 同
 通譯が居らず外人はつとかれ 同
 通譯を呼んで来ますと汗をふき 同
 麻雀を通譯なしでやる茶房 普
 車夫ちよつと税関までは通譯し 同
 通譯が笑へば俺も笑つとき 同
 通譯はアイシーばかり云つてゐる 同
 言ひ分を通譯半分も云はぬらし 同
 怒つても通譯だけに任せとき 同
 通譯へあまり頼られても困り 同
 通譯の他は見上ぐる大男 同
 通譯を除けて撮した寫眞班 同
 訊きなほしてゐても通譯も見え 同
 痒いところ残して通譯やつと濟み 同
 胡覺化して置けと通譯肚をきめ 同
 通譯も意氣込まれるとちと困り 同
 高文はバス通譯とまで行かず 同
 古美術も突め通譯志願する 同
 通譯は晩のお供も致します 同
 通譯が出来て軍屬志願する 同
 あの人の手眞似の方がよく通じ 同

シーボルト通辭を抜きで問へて来る 同
 港の子一寸通譯してこませ 同
 丸刈で野暮に見えてる背廣服 白面人
 丸刈にして頼もしき眉に見え 同
 丸刈で體操教師すぐわかり 同
 丸刈にせよとは旦那殺生な 恒
 戦友の刈る丸刈の痛いこと 同
 丸刈が男らしいと母は云ひ 同
 丸刈の肩をたゝげば人違ひ 同
 丸刈りの専務の押し強いこと 同
 丸刈りの小さい喪主に泣かされる 普
 丸刈りと國民服で押し切る氣 同
 老人の丸刈り女中任せにし 同
 丸刈りの白髪で役所から来る使ひ 同
 丸刈りが伸び過ぎてゐる出養生 同
 丸刈にして吐られに行きました 同
 丸刈で無帽で秋の風をゆく 同
 丸刈にしてから詩吟だけが藝 同
 相談もせず丸刈にアデイウする 同
 ヘル・マツオカあの丸刈で覺える 同
 氣まぐれにした丸刈をほめられる 同
 影法師丸刈一寸伸びて来る 同
 七月二十日
 お家はなんも裸してはる女中難 孤
 裸する拍手に小さい絲切齒 同
 御手水へ裸の用をする妓 同

安來節女將の褌借りて来る 普
 嫁ぐ娘に褌持たせるお婆さん 天
 簡素美を知つてか茶摘み赤褌 同
 兒があつて嫁の褌も板につき 同
 豆腐屋を褌の儘で呼びに出る 同
 エプロンと褌つゝむと百貨店 同
 薙刀をもつと褌がよく似合ひ 白面人
 片褌習文拂ひがもう近い 同
 お喋りの過ぎた褌を締め直し 同
 カンカン帽捨つてくれし褌の娘 恒
 廻覽板褌のまゝで話込み 同
 お手傳ひすると邪覺する子の褌 同
 内職の褌に髪も艶がなく 同
 宿帳へ詩人と書いた社長さん 同
 内職も出来ず半端の主事の次 普
 轉業の内職に生く茶の師匠 天
 本職をやめて歌人で名が通り 同
 隣組あの人職も知られたり 同
 支配人任せて洋畫ばかり描き 恒
 本職の方は駄目だと云ふ噂 白面人
 本職の話は好きでないらしい 同
 スカタン論評をしてうやまはれ 孤
 誤字誤讀パーマネットがちとおかし 同
 ビツグニユース鶴呑みに出来ぬのがかし 同
 インテリにさせて母親忘れられ 恒
 常會へインテリ今日も遅れて來 白面人
 裸になることをインテリたゞ嫌ひ 同
 インテリが寄ればたゞもうけなすだけ 同

「痛いのか」と問へば黙つてはゐる波夢造 同
 「トロ一丁」じつと唾液がわいて來た同 同
 酒豪なり刺身などに目もくれず 萬
 刺身でも食べますと云ふ汪主席 雷
 白衣の身夢で鮓の刺身食ふ 同
 刺身から先づ喰べて見る歸選兵 同
 感狀の部隊に我子今は亡し 杜
 病室で部隊名呼びし友想ふ 丹
 部隊動かんとす曉の霧はよし 平
 わが部隊の戦略を論じて二等兵 鏡
 大休止部隊部隊に煙が立ち 雨
 雨男ゐて白靴へ曇つて來 月
 下足番白靴容赦なく括り 銳
 靴抱いて眠つた昔懐かしい 同
 五月晴靴音もなく白衣なり 跳
 サヨナラをさせられる子の靴でぬげ 平
 靴磨きこんな靴とは思へども 三
 みぎ左なき御靴を参拜す 姥
 七月十日
 貸ポット鰻の香かいでゆき 水
 提灯でポットの数の賑やかさ 棹
 こんな處に仕舞ふか冬の貸ポット 青
 貸ポットコッソと當て、叱られる 美
 算盤へ兩手を組んで無言なり 同
 内輪でもこうだと珠を弾き上げ 水
 速算へ派出に騒くは女事務 棹
 七月二十四日
 ステッキは子供が出来て用がなし 青
 ステッキで草を薙いでる待ち呆け 美
 婦人會決議しといつて不平なり 青
 不平らし一座黙した會議室 美
 何が平かと四角な眼で問はれ 波
 鏡

川柳忌

★九月六日(土曜日)午後六時
 ★御津八幡宮(電話南八六四〇)
 (南區八幡町佐野屋橋筋角)

★兼題「落下傘」三句 麻生路郎選
 「波止場」三句 橋本線雨選
 ★講話「柳祖在りし頃」麻生路郎
 ★岩崎柳路氏北支蒙騷寫眞展觀

主催 川柳雜誌社

有恒川柳會(大阪)

六月二十一日

金岡陸軍病院慰問 鏡々報

あの顔にあんな笑ひがあるとやら 仲
 微笑たところでライカは撮つちまひ 村

大阪警察病院句會(大阪)

七月十九日

川柳報

振つて飲み透かしては飲む薬瓶
薬取り病人の無理聞いて行く
薬瓶勝手手は遠ふ上戸の手
借金を断る手前薬瓶
くすしにも今日枕邊の薬瓶
蟬の聲腕白時代を思ひ出し
成金の子はすぐわかる夏祭
疲れけり朝の訓話を蚊帳できく
螢がり子供にばかりとらして居
ビヤホールコップ一杯囓んで飲み
大掃除去年の記事を讀みなほし

小郡句會(山口縣)

七月十日

勇記報

親切に教へた線路杜絶され
梅雨晴れて一度に夏を呼び寄せる
梅雨ばれの今日本格の蟬の聲
あまたるい電話に社長目を細め
モシ／＼とはすむ電話の忙しさ
通話支障皆交換の罪となり
蠅打ちの音のみ高い隠居部屋
蠅一つ来て眠れない子に育て
驛長も訛で叱る電話口
電話口たれかの唄も聞えて來
電話にも丁稚お叩頭を怠らず
待つてゐる受話器へ時計が鳴つて來る
麥島奉仕班長派手に刈り
麥園子出來て子供を呼びに行き
黄昏れてまた麥とりの發動機
ふる蠅の目先に浮ぶ故郷の畑
故郷土産花一枝もさげて居る

徐州川柳會(徐州)

六月十四日

ひろし報

進 五 正 柳 道 正 久 湧 柳 河 浩 童
内地から無スフの浴衣せがまれる 紅夢樓
英租界宿の浴衣でおし歩き としを
初年兵浴衣でハツとかしこまり ひろし
浴衣着て珍らしい町案内され 雨町
一匹の蠅よわびしい食卓よ 爾郎
蠅を追ひ追ひ父ちゃんを待つお膳 雨町
支那らしく蠅はのろまに叩かれる ひろし
金網の蠅へアースの氣味のよき 同

きりん句會(松江)

七月十七日

於 通信診療所 湖雲報

煙草の輪窓案にくれたまよに出る 俊治郎
吉報の様に小包とどけられ 一聲
生活苦未だ禁煙の餘地があり 嘉夫
隣組債券持たぬ家はなし 南松
小包の中から人形泣いて出る 四希
賣り出した日に賣り切れた豆債券 靜朗
夜動料債券になり彈丸になり 松江子
消印は故郷小包懐しく 逸兒
債券袋坊やの分も入つてゐる 湖雪
文化映畫一つ利口になつて出る 快哉
文化映畫蛙がビヨント向きかへた 山川兒

松坂俱樂部句會(大阪)

八月三日

石井白面人報

煉酌へ出す手料理に念が入り 普天
割烹出其手料理の水臭く 同
綱船の船頭酔ぬたもこしらへる 同
手料理を賞めれば火加減打あける 同
川青ち鰻魚たくだけは別の腕 同
僧坊の和へ物板場感心し 同
手料理が安心ですと醫者が去に 同
我慢しや若奥様のお手料理 生々庵

お手料理ほめて折詰までもらひ 同
父ちゃんの手料理臭い鰻也 同
まづいのが取り柄ですとお手料理 同
お手料理ほめては見たがさりながら 同
經濟のためとは云はぬお手料理 同
お嬢様の手料理台所せますぎる 同
手料理で又涙ぐむ三周忌 同
廻覽板料理の仕方聞いて去ぬ 恒明
手料理が出来て新聞たまれる 同
おそいわと手料理二度もぬくめたり 同
うちの娘がつくつたんでと膳を出し 同
手料理へ娘の智慧も一寸借り 同
ねころんだあなたに見せる料理集 孤蓬

手料理は父だけベセリつけておき 同
食道樂またならんで來る市場 同
獻立を帯にはさんで來る市場 同
喰ひつめて出たのが都で二ヶ月前 同
都會のアラ判り切つて、懂がれる 同
都會ではこの草お金になるそうなる 同
榮轉だなんて都會を渡りゆき 同
おませな事云つて笑はず都會の子 恒明
老夫婦孫の顔みに都會へ來 同
大の字にごろんとねたい費なり 孤蓬
こゝに人間が住んでゐるピルの窓 同
都會人もつたいたくも醫者を撰り 同
引かされる妓はお料理も出來たか 同

「安産のために」冊子呈上

片瀬醫學博士
「安産のために」冊子呈上

片瀬醫學博士 推獎
片瀬醫學博士 監査

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の収縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 推獎
片瀬醫學博士 監査

のために

あ産

ママカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店



三井寺に於ける石麿(上)生凡(右)トア(左)の諸氏

柳界展望

催

▼本社句會御津八幡宮で開催(八月二日夜)・松坂俱樂部麻生路
 郎川柳講座(八月三日・十七日午後一時)・有恒俱樂部川柳講座(八月十四日・二十八日午後五時)・阪大川柳會(八月二十日午後四時)・警察病院川柳會(八月十九日)以上いづれも路郎主幹出席。▼不朽洞會總會が八月十日午後二時半から大鐵百貨店六階A室で開催された
 ▼阪神電鐵産業報國會、文化部川柳會の創立第一回句會が八月六日
 尼崎本社で開催された。▼川雜廣島支部例會は八月六日催された。
 ▼永らく休會を見てゐた川雜媛川支部は八月一日久しぶりに句會を

消息

山内凡狗居に於いて開催、盛況を極めた。▼市電川柳會では七月八日京都八瀬、大原巡りの吟行會を催した

▼妹尾八九滿氏(不朽洞會員)は八月上旬郷里へ歸省八十歳の御高齡で尙壯者をしのぐ御頑逆の膝下に中旬頃迄遊された。▼鈴木可香、中西千周、曾我久香、今井周金、小野ちえ

子の諸氏は八月二日、御嶽山登山吟行をされた。▼石崎柳石氏(廣島市)は六月末以來病臥中とのこゝろ、此程全快された。今後の御健闘を期待します。▼戸倉普天氏(不朽洞會員)は職線勇士慰問のため「川雜」發送につとめてゐられる。▼長野文庫氏(今治)は八月初旬西山興隆寺で開催された、商店道場に參加された。▼本社編輯部の麻生アト君と、僕は去る七月中旬、大津の鈴木石鹿氏(不朽洞會員)を訪問、同氏の案内で紀三井寺、近江神宮、日吉神社、叡山等に參拜。

▼尼緑之助氏(鎌川)藤野華村氏(同)は今市市出雲町役場へ轉勤
 川雜尼崎支部一行は八月七日早朝富士山頂に着し、川雜並びに尼崎支部萬歳を三唱して下山。▼森宗男氏(不朽洞會員)は半歳前から吳に移られた。▼高鷲亞鈍氏は九州四國の旅から歸つてから、令兄

藤村雅光氏經營の二葉屋商店に勤務されてゐる。▼大坂形水氏(不朽洞會員)は八月初旬、郷里淡路へ歸省。▼岩崎柳路氏夫妻(不朽洞會員)は二三ヶ月歸省してゐられたが八月五日の夜行で離阪、十一日に無事張家口に歸へられた。

慶弔

▼河野夜王氏(不朽洞會員)は此程目出度く三男雅充君を儲けられた
 ▼森山さわた氏(鎌川支部)も可愛い、次男坊を儲けられた由。▼酒井美知夫氏(不朽洞會員)は長女壽美子さんを儲けられた。▼山本耕一路氏(松山)は先月二女を儲けられた奥様の産後が悪く入院されてゐたが最近退院された。▼山田宙望氏(東京)の令妹は七月二十日永眠された。謹悼。▼本社贊助員長谷川一徹博士の嚴父は八月七日八十九歳の高齡で永眠された謹んで哀悼の辭をささぐ。▼米田茶夫樓氏が過般永眠されました。謹みて悼む。

▼西藤義春氏は松本市東ノ町七七五へ。▼竹田文代氏は大阪市西淀川區塚本町新大阪莊内へ。

轉居

▼吉岡笑々氏(松江)は遷居に。
 ▼山内凡愚氏(鎌川)は凡愚に。
 ▼中村對州坊氏(大連)は西生に。

改號

▼七月號各地欄三十一頁上段古林坊は香林坊。▼八月號各地欄三十四頁上段十六行目の「へそくりで買ひなす」と「合はず」は路生氏の句。

正誤

▼左記の諸氏が不朽洞會へ入會された。
 河野夜王氏(清水白柳子氏紹介)
 津路紅多呂氏(夷)笑氏紹介
 ▼増元翠陽氏は家事の都合で八月に不朽洞會を退會された。

★社の回覽板

▼立秋も過ぎた。流石に海の子も減つた朝夕は澄びよい。句の秋をおもはせられ。近ごろは誰も彼も忙がしい。読者も、作家も、寄稿家も忙がしい。その忙がしい中で、讀み、作り、書く時間が得られることは恵まれた人達だと云はねばならぬ。何彼と忙がしい日本に生きるためには、忙がしいに茫然とするやうではいかぬ。忙がしいほど、クッ落着きが必要である。大きな仕事を着る人間は決してばたつかぬ。東郷さんが艦上で植木に水をやつてゐる心を心としなければならぬ。私達にとつては其處に川柳がある。▼前號の特輯號は豫想外の好評だつた。早くから後から後からの註文に品切れで、残つてゐるような書店を買ひ漁つて、責をふさぐ

後記

▼左記の諸氏が不朽洞會へ入會された。
 河野夜王氏(清水白柳子氏紹介)
 津路紅多呂氏(夷)笑氏紹介
 ▼増元翠陽氏は家事の都合で八月に不朽洞會を退會された。

御挨拶

過日久し振りの歸省に不拘ず柳友諸兄に御面接の機会を逸し誠に失禮仕候、而し乍國事多端の折柄職域奉公に努力御繁忙の秋とて御訪問を差し控へたる小生の眞意御了解の上何卒御寛恕賜り度く御詫勞々右歸蒙の御挨拶申上候
 尙殘暑未だ去り難歸候銃後の柳友諸兄の御健康と御健吟を遙かに祈居候
 敬白

川柳雜誌社蒙疆支部
 岩崎柳路
 同 松代

事 幹 と 部 支

道頓堀支部(大阪)萬よし
函館支部(函館)展修
梅田支部(大阪)船美
篠川支部(島根)縁之助
鳥取支部(鳥取)鐵州
松山支部(松山)耕一路
天王寺支部(大阪)八九満
鶴町支部(大阪)双虎
御池橋支部(大阪)いわを
松江支部(松江)山川兒
大鐵局支部(大阪)柳太

西條支部(愛媛)英賀夫
城南支部(大阪)申仙
今治支部(今治)文庫
川光笑會(大阪)里十九
竹原支部(廣島)島芳郎
廣島支部(廣島)島風來子
豐中支部(豐中)紫香
下關支部(下關)半休
北鮮支部(羅津府)美笑
蒙疆支部(張家口)柳路
上海支部(中華)天作

鐵道病院支部(大阪)春巢
渚支部(大阪)みのる
四ツ橋支部(大阪)翠芳
布哇支部(布哇)寛花麗
堺支部(堺)角堂
岡山支部(岡山)九坡
尼崎支部(尼崎)美知夫
日和佐支部(徳島縣)賢次
川早鐘會(大牟田)蝶人
大洲支部(愛媛縣)椋影

主幹 藤生路郎
贊助員 池澤樂居
長谷川一徹
大田弘雄
岡本一平
片岡直生
笠原路生
嘉納純二
田中辰秀
長崎柳太郎
長岡半太郎
藤野晴演
藤本卯之助
穎原退藏
淺田太一郎
末弘巖太郎
客員 鳥山一步
沖山三郎
大島濤明
大谷五村
龜井辰修
川村花菱
米村あん馬
田村孝之介
谷脇素文

高尾亮雄
生方敏郎
窪田銀波
山本久留美
安田五健
前田幸二
柴谷春雨
篠原省二
蛭子好古
森里東魚
不朽洞會員
橋本綠雨
高橋かほる
福田山雨樓
西田山雨樓
永田里九
奥村丹路
岩崎柳路
寺井柳路
大西八歩
高澤一浪
戸田孤篷
石井白面人
川出美根子
川島生々庵
戸倉普天
小畑自由朗
古川風竹

前山北海
古川麗石
岩井貴志
米本貴子
內藤草一
三輪晚翠
水谷美水
大坂形美
田中雨月
平佐平三
橋本波造
藤岡至藝瑠
西川青美
北山悟郎
姫山夕鐘
村松夕鐘
市場沒食子
吉田水車
妹尾八秋
須崎紀太
春元紀太
西藤青兒
後藤青兒
宮岡根白峰
石曾根白郎
中西おさむ
中原史風
正本水客

黒川紫香
丸尾潮花
岩橋双虎
岡松代人
岩崎松陽
增元風巢
酒井春風
北川斗巢
布川筑巢
小布方正
尾崎香附子
佐竹香附子
押谷たけを
關根山彦
西川一
櫻川波菜
田中風葉
中原鏡人
濱中久米雄
好崎久米雄
杉原大研子
菊原小松園
魚住滿潮
岩本雀踊子
清水友帆
清水秀雄
清水史雄
清水白柳子
西川愁水

中内翠芳
多田多樓
森田宗賢
大森風來子
玉井彩泡
鈴木九坡
逸見伯峯
石原九峯
植木一峯
夷邊曉石
渡野曉石
矢野青鹿
高野青鹿
高野青鹿
國弘半彦
道廣世紀彦
岩崎水虹
岩崎水虹
阿萬萬記
谷川萬記
青柳風記
青柳風記
飯井美文
飯井美文
小川美文
小川美文
飯井美文
飯井美文
津路玲明
津路玲明
河野紅多呂王

募 集

第十八卷 第十一號課題
九月廿日締切
(十句以内)

獨立圖 大島濤明選
石會根民郎選

第十八卷 第十二號課題
十月廿日締切
(十句以内)

食後 奧村丹路選
菊澤小松園選

第十九卷 第一號課題
十一月廿日締切
(十句以内)

沿線 麻生葭乃選
橋本綠雨選

每號募集 (每月五日締切)
近作柳樽(雜吟) 麻生路郎選
川柳塔 麻生路郎選

各地柳壇 (會報)
同舟近詠 麻生路郎選
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定
▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る限る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。
▲締切は厳守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌 第十八卷 第九號
毎月一回一日發行

定價
一冊 金三〇錢
半年 金一四〇錢
一年 金二八〇錢
外圍運本には海外郵送料費の加算を乞ふ。
御注文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御注文は何時よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十六年八月廿五日印刷
昭和十六年九月一日發行

禁無斷轉載 本誌の刊行は有保
證新聞紙法に據る

廣告 本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

發行所 川柳雜誌社
大阪府西區江戶堀上通二丁目四番地(附利ビル)
振替(大阪七五〇五〇)
電話 土佐堀 三三三三番
八八一六番
三三三三番
三三三三番

協化文版出本日
會同四登號員會
五八
行押前入 麻生 幸二 郎

東 京 市 神 田 區 淡 路 町 二 丁 目 九 番 地
配 給 元 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

★每號、戦線の勇士に送られた
宛に御申込み下されば郵税を奉
仕して直接發送致します。

送住
者名 本所氏

笑 映 と 笑 苦
強 勉 生 人 で

新川柳評釋

麻生路郎著

★どのページから読んでよい。面白いから引づられて読む。
讀み了つたら、川柳の味が判るといふ本である。(不朽洞版)

★定價 八十錢 (送料 六錢)

川柳漫畫

累卵の遊び

麻生路郎著 裝谷榮甫註

★川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで讀んで破いて摺り餅にしたのが「累卵の遊び」である。これは著者の序文の一節である。

★特價 八十錢 (送料 九錢)

發行所

不 朽 洞
三 版 大 三 〇 九 二 番

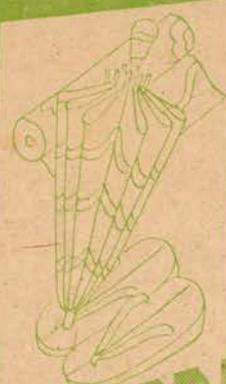
アサヒビール

大日本麥酒株式會社

含有滋味が
もたらす元氣

愛飲家に
確認される

ち食ふとんから
湖 同
を地法善寺境内



場 賣 持 品 四 用 實 貨

選 定 の 百 貨
奉 仕 の 廉 價



大 版 そ ご う 心 齋 橋

SENRYU ZASSHI

NO. 212

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

りとびきに

美顔水

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▼ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物で困りの方に大きな喜びの糧！

お勸したい薬です！

▲定價一瓶四十五錢・六十五錢・一圓三十錢。全國藥店にあり

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！



是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	・

阪大・京東

館天順谷桃